



Vol.2

# ANNUAL REPORT

京都造形芸術大学 共同利用・共同研究拠点 アニュアルレポート

## 未踏の原野を行く試み

「舞台芸術作品の創造・受容のための領域横断的・実践的研究拠点」代表 天野 文雄  
 京都造形芸術大学舞台芸術研究センター所長／能楽研究



「いままで、どこでもやっていないことですから」。これは筆者が渡邊守章前拠点代表からバトンを受けてからの一年あまり、運営で困難な状況に直面したさいに、運営の中心で奮闘している森山直人さんからしばしば出た言葉である。たとえば、2014年度からはじまった公募研究では、採択された研究グループの劇場使用の日程の調整がなかなかむずかしかった。われわれの大学には、春秋座とstudio21という2つの劇場があって、その劇場を活用しての創造・研究活動が本拠点の最大の特徴なのだが、両劇場とも拠点がおかれている舞台芸術研究センターの主催公演などで、公募研究が採択された時点では、かなり埋まっているからである。もちろん、それを見越して、公募研究グループ枠としてあらかじめ複数の期間を確保するなどの対策はとってはいたのだが、そのどれもが都合がつかない研究グループもあれば、研究グループ同士で希望する日取りがかちあったり、それに劇場を「動かす」ための技術的・人的な問題もからんで、調整に予想以上の時間がかかったのである。これは2014年度から学外の研究者やアーティストによる公募研究がはじまって体験したことが、冒頭の森山さんの言葉は、たとえば、そういうときに出了のである。

われわれの拠点がかかげている目標は、たしかに「どこでもやっていないこと」ではないかと思う。もっとも、それは「日本のどこでも」というべきなのかもしれないが、「舞台芸術」という、近代日本においては長いこと研究上の市民権を与えられていなかった分野において、〈創造〉と〈研究〉、〈実践〉と〈理論〉、〈アーティスト〉と〈研究者〉が連携して〈劇場実験〉を行う、しかもその場が「大学の劇場」ということになると、まさに「いままで、どこでもやっていないこと」になる。したがって、事業全体の運営もさることながら、各研究グループの活動も必然的に試行錯誤が不可避となる。そのことは本号の8グループの活動報告の行間に読み取ることができるはずである。私見では、〈創造〉と〈研究〉の連携という点では、いずれかといえば、「アーティストによる研究」のほうが「研究者による研究」

より多い印象があるが、これは〈創造〉に有用な〈研究〉が少ないという現在のわが国の一般的な〈研究〉状況によるのであろう。これなども試行錯誤の一例といえようか。

一方、たとえばキム・イェリム氏の報告が伝えているように、すでにめざましい成果が生まれているケースもあるが、これは独自の活動も含めた3年にわたる活動の結果である。成果が出るまでには、相応の時間が必要なわけで、その分、各研究グループの今後が期待されるのである。

なお、2014年9月には、拠点事務局の専用スペースが舞台芸術研究センター内に誕生した。これで拠点運営の体制がいっそう整ったことをご報告しておく。

### 目次

■テーマ研究Ⅰ 近代日本語における〈声〉と〈語り〉——クローデル『縞子の靴』上演のための実践的研究	p.2-4
■テーマ研究Ⅱ コンテンポラリーダンスの創造性と方法論をめぐる実践的研究	p.5-7
■テーマ研究Ⅲ 〈マルチメディアシアターの再定義〉をめぐる実践的研究	p.8-9
■テーマ研究Ⅳ 舞台衣裳のモダニティに関する実践的研究	p.10-11
■テーマ研究Ⅴ アジアの大学における演劇教育——劇場を活用した舞台教育の方法論的探究	p.12-13
□公募研究Ⅰ 老いを巡るダンスドラマトゥルギー	p.14-15
□公募研究Ⅱ 舞台芸術におけるLED照明の可能性ならびに、デジタルプログラミングとの連動	p.16-19
□公募研究Ⅲ 想起の空間としての劇場	p.20-21
■テーマ研究Ⅱ関連レポート 日韓合同製作プロジェクトのプレゼンテーション(仁川・京都)	p.22-23

テーマ研究

I

全7回+特別講義1回

## 近代日本語における〈声〉と〈語り〉

 演出家／京都造形芸術大学客員教授 渡邊 守章  
 京都造形芸術大学舞台芸術研究センター主任研究員

## 概要

本研究プロジェクトは、平成25年度に本研究拠点において実施したテーマ研究「近代日本語における〈声〉と〈語り〉」(研究代表者：渡邊守章)での研究成果を踏まえ、「近代日本語」を用いた具体的な舞台作品の上演を視野に入れつつ、本研究拠点の趣旨でもある「舞台芸術作品の創造」のための研究、すなわち「劇場を活用した〈ラボラトリー機能〉」の実践を、より本格的に組織しようとするものである。

平成25年度に、計7回に亘って実施した研究会では、能・狂言における日本語の「声」と「語り」の技法を検証し、明治以後の「近代」において、それがどのように変容してきたのかを、樋口一葉、夏目漱石、芥川龍之介、泉鏡花、折口信夫、三島由紀夫などの言語態を具体的かつ多角的に検討してきた。そこであらためて浮上してきた問題の一つは、「日本語の近代」を考察する上で無視できない「翻訳文体」の問題であった。このテーマは、近代日本の文化史上、きわめて大きなテーマであるばかりでなく、日本における近代劇の実践主体であった「新劇」も直面した、「演劇論的」にも重要なテーマである。ところで、20世紀フランス演劇を代表する劇詩人ポール・クロードル(1868～1955)は、外交官として世界各地に駐在し、その文化を貪婪に吸収した、「グローバル化時代の劇詩人」としては、特権的な立場を保ち続けている。大使として日本に滞在中に完成した「自由詩形」による戯曲『繻子の靴』は、全曲上演すれば15時間を超える大作であるが、本研究プロジェクトの研究代表者である渡邊は、2005年に上演の可能性を想定しつつ日本語に翻訳し、高い評価を得た。フランス語韻文劇の伝統の超克を強く意識したその原文は、日本語としても、伝統的な記憶を自覚しつつも極めて現代的な劇言語であり、日本式現代劇である「新劇」の言語では、対応することができない。

本研究は、研究者とアーティスト、舞台技術者が共同で研究会を組織し、2年間かけて、近代韻文戯曲の傑作『繻子の靴』の上演台本と演出プランを具体的に作成することを目的としている。その上で、劇場実験においては、4部にわかれる本戯曲(「1日目」～「4日目」と名付けられている)のうち、クロードル劇として、言語と身体的作用が過激に現れる幾つかの代表的な場面のプレゼンテーションを行い、劇詩人クロードルとしては、当時(1920年代)の極めて前衛的な発想(例えば、舞台上における映画の使用)を、日本で観た伝統演劇(特に歌舞伎)の演技や舞台技法につなげた場面を選び、「声」と「語り」の問題意識に沿った日本語の「詩的・劇言語」の可能性について、多角的に検討した。なお付け加えておけば、本研究拠点の事業とは別であるが、平成28年度には、京都造形芸

術大学舞台芸術研究センターにおいて、『繻子の靴』の上演を(〈ラボラトリー機能〉)に対する〈ファクトリー機能〉として)計画しつつあり、本研究は、それを視野に入れた実験と検証の場としての位置づけももっている。

## 第1回研究会(非公開)

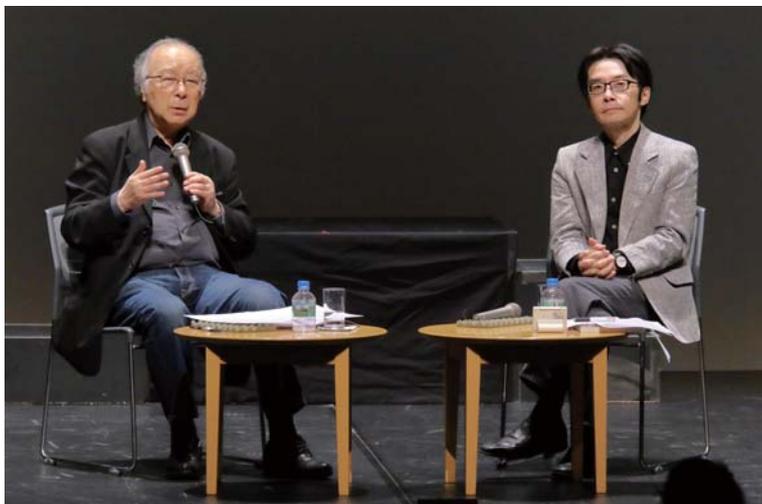
テーマ：「実技演習1：研究会の目的・進め方の全体構造」

日時：2014年7月1日(火)～5日(土) 14:00-20:00

会場：京都芸術劇場 楽屋2

参加者：渡邊守章、小坂部恵次、鶴坂奈央、千代花奈、永井茉莉奈、岩崎小枝子、高谷史郎、川原美保、塚本玲奈

内容：冒頭の5日間は、まず翻訳家・演出家による作品分析と、上演版作成の上での具体的な諸問題の根幹にある、単なる近代劇の発声訓練では処理できない「クローデル風ヴェルセ」と呼ばれる「長短入り混じった韻文」による台詞の身体的処理から、劇構造の舞台的具象化に必要なとされる技術的問題に到る諸課題を整理し、稽古の方法や手順、取り上げるべき「場面」、今回のテクノロジー的課題でもある「ハイ・テク・メディア」の取り込み方、等について、具体的に論議した。その上で、差し当たり稽古の対象とする「典型的な情景」として、「一日目」第5場の「ブルエーズによる聖母への祈り」(ここで表題になっている『繻子の靴』が、聖母に委ねられる)、「二日目」の最後を飾る第十三場「二重の影」と第十四場「月」の、超現実な情景、ならびに「三日目」の中心に置かれている主人公と守護天使との対決(第八場)を選ぶことにした。これらの情景が選ばれたのは、主題論的にも言語態的にも、作品のキーとなるべき《言語》が、その要求する《姿》とともに濃厚に書き込まれているからであり、劇詩人クロードルの「日本体験」もまた、そこに重ね



『繻子の靴』上演のための実践的研究(解説) 渡邊守章・浅田彰 撮影：清水俊洋



『縞子の靴』上演のための実践的研究 撮影：清水俊洋

られているからである。同時に、高谷史郎に委ねられている「マルチメディア映像」も、恐らく有効に用いられうる情景でもあるからだ。クローデル劇には限らないが、台詞の「息」の表す力と音楽性は、「読み」の段階でしっかりと捉えられなければならないから、まずは演出家が可能な限りでの見本を聞かせ、その上で、4人の女優による稽古を始めた。

## 第2回研究会 (非公開)

テーマ：「実技演習2：男性の主要な役の台詞造形」

日時：2014年7月28日(月)-8月1日(金) 14:00-20:00

会場：京都芸術劇場 楽屋2

参加者：渡邊守章、天野文雄、小坂部恵次、鶴坂奈央、千代花奈、永井茉莉奈、岩崎小枝子、吉見一豊、石井英明、瑞木健太郎、高谷史郎、原摩利彦、川原美保、塚本玲奈

内容：種々の事情により、今回は大学サイドからは、渡邊演出の経験のある四人の女優が参加した。作品の結節点にもなるような重要な場面で、俳優として男性が必要な情景は当然に多いわけだから、渡邊が籍を置く演劇集団「円」において、渡邊演出に参加している3名の男優に、5日間、京都に来てもらい、劇のヒーローであるドン・ロドリッグと、色敵役で、極めて重要な役であるドン・カミーユが登場する場面を選んで、この5日間をフルに使って稽古をした。音楽担当の原摩利彦氏との打合せを行った。

## 第3回研究会 (非公開)

テーマ：「実技演習3：演技とマルチメディア映像」

日時：2014年8月18日(月)-22日(金) 14:00-20:00

会場：京都芸術劇場 楽屋2

参加者：渡邊守章、小坂部恵次、鶴坂奈央、千代花奈、永井茉莉奈、岩崎小枝子、高谷史郎、川原美保、塚本玲奈

内容：女優による情景の「読み」を肉体化する作業をしつつ、身体行動の方向を探る作用をした。併せて、映像の高谷氏と基本的なコンセプトについて打合せ。

## 第4回研究会 (非公開)

テーマ：「実技演習4：立ち稽古」

日時：2014年9月1日(月)-5日(金) 14:00-20:00

会場：京都芸術劇場 楽屋2

参加者：渡邊守章、天野文雄、小坂部恵次、鶴坂奈央、千代花奈、永井茉莉奈、岩崎小枝子、高谷史郎、原摩利彦、清川敦子、川原美保、塚本玲奈

内容：『縞子の靴』日本語版には、高谷史郎によるマルチメディア・パフォーマンスが組み込まれることが、当初から決まっていた。しかし、高谷史郎の映像は、原則として「劇的物語」のあるものではなかったから、昨年度のテーマ研究Ⅲで、「二重の影」を作った経験を、どのようにして『縞子の靴』の「全曲上演」に生かせるかと言う点が、今年度の課題研究Ⅰと同Ⅲを結ぶ主題であった。そのため、高谷チームは、音響・音楽のデザイナーも含めて、出来るだけ稽古に立ち会ってもらうことにした。そのためにも、演技者のほうは、すでに「立ち」に入っていなければならなかったし、出演者たちは、演出家のこうした期待によく応えた。「動き」の造形を進めるのに併せて、差し当たりの「衣裳」のデザインの決定もしなければならなかったから、そのデザインの問題に立ち向かった。

## 第5回研究会 (非公開)

テーマ：「伴奏音楽の選択」

日時：2014年9月12日(金)、13日(土) 15:00-17:30

会場：京都芸術劇場 舞台裏バックヤード

参加者：渡邊守章、原摩利彦、塚本玲奈

内容：既存の音楽を使うものについて音楽のプランナーである原摩利彦氏とバロック音楽全集を聞きながら主要な方向性を決めた。

## 第6回研究会 (非公開)

テーマ：「実技演習5：動きと音響効果」

日時：2014年9月26日(金)-30日(火) 14:00-20:00

会場：京都芸術劇場 楽屋2 / こども芸術大学(京都造形芸術大学内)

参加者：渡邊守章、小坂部恵次、鶴坂奈央、千代花奈、永井茉莉奈、花柳綱仁、高谷史郎、原摩利彦、清川敦子、川原美保、塚本玲奈

内容：この週で、稽古場における稽古は終える予定であった

し、次回からは春秋座に入っの稽古となるはずであるから、女優たちの声、身体、意識の十分な調整が必要であった。併せて、高谷映像のプランも詰めていった。この週における特筆すべき展開は、『繻子の靴』の作者クローデルが、日本滞在中に観た歌舞伎から想を得たことがほぼ確実な「連理引き」の手法を、花柳流の名取である卒業生に来てもらって、「ツケ打ち」を実際に入れてもらって、効果を確かめた。

### 第7回研究会（非公開）

テーマ：「舞台稽古」

日時：2014年10月1日（水）- 4日（土）9:00-21:00

会場：京都芸術劇場 春秋座

参加者：渡邊守章、小坂部恵次、鶴坂奈央、千代花奈、永井茉莉奈、花柳綱仁、高谷史郎、古舘健、原摩利彦、清川敦子、川原美保、塚本玲奈

内容：劇場に入ってから、作業の中心は、まずは「高谷組」のマルチメディア映像の作業に移った。俳優の稽古は、稽古場で行いつつ、演出家は、高谷映像の効果を検証した。この実験の最終日には、無料で劇場を観客に開放して、舞台上で行われることへの観客の反応を検証した。春秋座が歌舞伎劇場であり、しかも花道のすっぽんも使う演出であったから、舞台空間の表象には、多くの課題が残された。特に、今回の実験には、照明の責任者が居なかったに等しいから、これは問題であった。併せて、登場人物が1人あるいは2人という情景を選んだこともあって、舞台の効果は必ずしも期待に応えなかったように思う。

### 第8回研究会（公開）

テーマ：『繻子の靴』上演のための実践的研究（解説と実験上演）

日時：2014年10月5日（日）

会場：京都芸術劇場 春秋座

観客数：145名

参加者：渡邊守章、浅田 彰、小坂部恵次、鶴坂奈央、千代花奈、永井茉莉奈、花柳綱仁、高谷史郎、古舘 健、原摩利彦、清川敦子、川原美保、塚本玲奈

内容：「ツケ打ち」の効果が、期待したようにならなかったのは、担当者が、稽古の最後になってようやく見つけたが、「ツケ打ち」の専門ではなかった、と言うような事情もあり、春秋座で「ツケを打つ」効果についての検証をする余裕がなかったことによる。そもそも、歌舞伎の「連理引き」の演劇の際には、演技者はほとんど台詞を言わないのが原則であることも、見逃されていたことの一つであり、こうした細部の検証も、劇場実験であったらこそ、検証できたことであり、稽古場では顕在化しなかった重要な局面である。歌舞伎劇場の「活かし方」は、それなりに計算されていたが、俳優の演技以外に、マルチメディア映像の表現という、次元の異なる表象が加わった場合の「舞台効果」は、更に検証されてしかるべきであるように思えた。まさに「劇場という現場における実験」が可能であったらこそ、当事者たちも実態を把握できたのである。

### 研究組織

研究代表者：

渡邊守章（演出家／京都造形芸術大学客員教授）

共同研究者：

天野文雄（京都造形芸術大学舞台芸術研究センター所長・教授）

小坂部恵次（京都造形芸術大学舞台芸術学科准教授／舞台監督）

川原美保（京都造形芸術大学舞台芸術研究センター制作／制作）

塚本玲奈（本研究拠点職員／演出助手）

研究協力者：

高谷史郎（マルチメディアアーティスト／ダムタイプ代表）

古舘 健（メディアオーサリング／ダムタイプ）

原摩利彦（音楽家）

清川敦子（舞台衣装）

吉見一豊（俳優／演劇集団 円）

石井英明（俳優／演劇集団 円）

瑞木健太郎（俳優／演劇集団 円）

鶴坂奈央（俳優）

千代花奈（俳優）

永井茉莉奈（俳優）

岩崎小枝子（俳優）

花柳綱仁（花柳流名取）



『繻子の靴』上演のための実践的研究 撮影：清水俊洋

テーマ研究

# II

全4回

## コンテンポラリーダンスの創造と方法論をめぐる実践的研究

京都造形芸術大学舞台芸術研究センター主任研究員／舞踊家 山田 せつ子

### 1 研究会の具体的方法と概要

本研究は、コンテンポラリーダンスをテーマにしたプロジェクトである。

現在、日本でも盛んな「コンテンポラリーダンス」の現状を踏まえ、その創造性と方法論を、①国際的視点、②国内的視点のふたつの角度から検証した。前者に関しては、韓国で世界的に活躍するコレオグラファー／ダンサーのキム・ソンヨンと日本の同世代の舞踊家白井剛が、異なるダンステクニックの「交換」「共有」をはかり、東アジアの「コンテンポラリーダンス」における共同作業の可能性を追求した。本学と同時に、韓国仁川アートセンターでの研究会もおこなわれた。このプロセスで、写真家の荒木経惟氏との共同作業も生まれ、年度末の本学春秋座を使用した上演実験では、舞台美術家の杉山至氏の参加も得て、ダンス作品としての「日韓ダンスコラボレーション」の上演（ラボラトリー機能）に対する（ファクトリー機能）として展開された。

他方、「国内視点」においては、京都でのダンスをめぐる企画「Dance Fanfare Kyoto」（代表・きたまり）をテキストに5回の研究会を実施し、国内に於ける若手のコンテンポラリーダンスの可能性を探った。

### 2 事例研究1『原色衝動』 （白井剛×キム・ソンヨン×荒木経惟）

2014年8月に韓国、仁川アートセンターでクリエーションを行い、その後、公開研究会として仁川アートプラットホームでプレゼンテーションをおこなった。この時点ではタイトルが【デュオを踊る『Sleep on the kill』】とされ、異なったダンス技法を持つコレオグラファー／ダンサーがどのような方法論で、共同作品を創り出すことができるかという具体的実験をおこなった。西欧のダンス技法を基礎にして作品を創り出すキム・ソンヨンと、内的衝動をムーブメントに置き換えていくダンス方法を取る白井剛が互いに振付けをし、それぞれの方法論の違いが、互いの身体にどのような影響を及ぼすか、コラボレーション作品を創り出す課題はどこにあるのか探った。その後、仁川アートプラットホームの小劇場スペースにおいて公開プレゼンテーションを実現した。ここでは、韓国の批評家も招き、公開後、作品の可能性について研究会を開いた。

ひき続き、2015年3月12日～21日に仁川での研究会を踏まえ、より具体的な舞台製作に向けた実験を京都造形芸術大学リハール室、公開プレゼンテーションを大学内劇場、春秋座でおこなった。仁川でのタイトルも作品イメージを固め『原色衝動』と決定した。写真撮影のための杉山至氏による美術スクリーン3種をはじめ、舞台美術として多数の椅子、ビニールホース

等が用意され、映像デザインの山田晋平氏による投射実験も行われた。箱形スクリーンの中で踊るキム・ソンヨンと映像の関係、 horizontals の巨大スクリーンの映像と白井剛のソロダンス、さらに手持ちカメラを使用した二人のデュオが実験された。ダンスが空間の中でどのような可能性を持つことができるか、観客に対してどのような視点を提示できるかを総合的に検証する場となった。

プレゼンテーション終了後、4時間に渡り、研究会参加者による意見交換がなされ、ダンス作品でのメディアの存在が身体に及ぼす影響がどのような可能性を孕むのか、装置としての映像や美術が身体を浸食し、あるいは、身体が映像や美術を変容させていくことでの作品の可能性について話され、作品上演に向けてのおおきな一歩となった。この作品は、2015年9月26日27日、京都芸術劇場春秋座で、2016年2月下旬に東京世田谷パブリックシアターでの上演が決定されている。



『原色衝動』劇場実験 撮影：清水俊洋

### 3 事例研究2『Dance Fanfare Kyoto』

若手コレオグラファー、ダンサー、演劇人を共同研究者に招き、『Dance Fanfare Kyoto』開始前準備会、終了後の総括、各企画の残された課題の検証、今後に向けて関西に於けるコンテンポラリーダンスの現状認識と課題(1)(2)が、5回にわたっておこなわれた。開始前の研究会では企画者であるコレオグラファー、きたまり氏から20代～30代のコンセプトを切り開いていくための、美術、演劇、音楽といったジャンルとダンスのあらたな実験提案があった。

終了後の研究会では、全体の総括と各企画の結果方向と課題を検証した。

和田ながら氏の企画『ねほりはほり』は、作家に対して、意図、行為のプロセスについて批評的な立場で対話を継続し、結果的に作品創りに関わるといものだが、若手コレオグラファーの

言葉の脆弱さへの危惧から発信したものである。対話の継続によって作家自身の言葉が耕され、作品の内的世界を深めていくという、ある意味ダンスのドラマツルグの可能性に繋がる実験として報告された。コレオグラファーの佐藤健太郎氏「振付け行為」、松尾恵美氏「振付け行為」、今村達紀氏「美術とダンス」から、独自の振付け方法の意図の発表があり、作家がどのような言葉を持ち、観客に向けて作品の中でどのように具体化していったかというプロセスの発表がおこなわれた。次世代のダンス作品が創られていく具体的な可能性を、これらの事例の中で検証し、ダンス技法の独自の発見、世代の中に安住しないコミュニケーションのあらたな可能性や、互いのネットワークを深めて行く方法について話された。いずれも、具体的な創作過程、公演と結びついていたため、より具体的に現実的な課題が現れてきていたが、この中から今後、単に方法論としてだけでなく、広い意味での創作の思考が生まれてくることを期待できる場であった。

#### 4 研究と実践の融合的可能性

コンテンポラリーダンスが多様化とともに、表現の磁力が薄まって来ているということは、ダンスの場にいる人々が昨今問題としていることである。ダンスがデザイン化され、引用によって作品を創り出すことも可能であるが、作家の根源的な欲求や衝動が見えにくくなっていることの原因はどこにあるのか。



【原色衝動】劇場実験 撮影：清水俊洋

作家が身体と言葉を格闘させ、作品を深めていくプロセスを充実させるために必要なことはどのようにしてあるのか。今回のふたつの事例研究においては、そのことに視点を置いた。事例研究1のすでに中堅としてそれぞれの国内外でも作品を発表している白井剛とキム・ソンヨンの作業は、ともに作品を創造する過程で、それぞれが培ってきた方法論や身体言語を解体せざるを得ない局面が現れ、そのことをさらに言語で共有していくというプロセスは想像以上に過酷な時間でもあったと言える。しかし、そのことによって場に化学反応がおき、互いのダンスの必然性を見つけ出す手がかりが生まれたことは、大きな成果と言える。また、事例研究2の継続的研究会は、若手の参加者がそれぞれの言葉とあらためて出会い、実践の結果を言語化していくことの必要性を認識する場となった。現在、批評言語が育ちにくくなっているダンスの場では、コレオグラファー、ダンサー自身が言葉を発掘し、実践と往復しながら自らの中に批評言語を生み出していくことこそ、コンテンポラリーダンスに求められていることである。そうしたプロセスが作品を育て、多様な表現が豊かに、力を持ったものとして観客の前に展開していくだろう。常に訪れる問題意識を、曖昧にすることなく受け取る場を共有していく試みは、ダンスの場を狭く閉ざすことなく、開かれたものとしていくだろうと考える。

#### 5 プロジェクトメンバー

##### 研究代表者：

山田せつ子（舞踊家／京都造形芸術大学舞台芸術研究センター主任研究員）

##### 共同研究者：

森山直人（演劇批評／京都造形芸術大学舞台芸術学科教授）  
寺田みさこ（舞踊家／京都造形芸術大学舞台芸術学科准教授）  
キム・ソンヨン（舞踊家）  
白井 剛（舞踊家）  
きたまり（舞踊家）  
川原美保（舞台芸術研究センター制作）

##### 研究協力者：

和田ながら（制作）  
今村達紀（舞踊家）  
松尾恵美（舞踊家）  
佐藤健太郎（舞踊家）  
木村典子（舞台芸術プロデューサー（韓国／ソウル））  
高樹光一郎（舞台芸術プロデューサー）  
杉山 至（舞台美術家）  
大鹿展明（舞台監督）  
岩村原太（照明家／京都造形芸術大学舞台芸術学科准教授）  
三上さおり（世田谷パブリックシアター制作）  
大久保歩（音響デザイナー）  
山田晋平（映像技術）  
清川敦子（舞台衣装）  
榎本了壺（デザイナー／京都造形芸術大学客員教授）  
イ・ドンミン（制作）  
キム・イエリム（舞台批評家）



『原色衝動』劇場実験 撮影：清水俊洋

### 日韓共同ダンス作品

#### 研究会①

日時：2014年8月5日-15日

会場：韓国仁川アートセンター

参加者：白井剛、キム・ソンヨン、木村典子

テーマ：「ダンス：互いの技法を越境し、交換するための実験」

#### 研究会②（公開）

日時：2014年8月16日 13:00-18:00

韓国仁川アートプラットホーム

参加者：白井剛、キム・ソンヨン、木村典子、山田せつ子、  
イ・ドンミン、キム・イェリム、川原美保、三上さおり、  
高樹光一郎

公開参加者 30名

#### 研究会③日韓共同ダンス作品『原色衝動』

日時：2015年3月22日 12:00-19:00

会場：春秋座

参加者：白井剛、キム・ソンヨン、山田せつ子、森山直人、  
寺田みさこ、榎本了壺、高樹光一郎、三上さおり、  
川原美保、杉山至、大久保歩、大鹿展明、清川敦子、  
山田晋平、和田ながら、イ・ドンミン、キム・イェリム  
参加者 40名

### Dance Fanfare Kyoto

#### 研究会① 研究準備会

日時：2014年7月5日 15:00-18:00

会場：楽屋2

参加者：山田せつ子、森山直人、寺田みさこ、きたまり、  
塚本玲奈、川原美保

#### 研究会② 成果について

日時：2014年7月11日 15:00-18:00

楽屋2

参加者：山田せつ子、森山直人、寺田みさこ、きたまり

#### 研究会③ 各企画 検証

日時：2014年7月29日 18:00-21:00

楽屋2

参加者：山田せつ子、森山直人、寺田みさこ、きたまり、  
和田ながら、今村達紀、松尾恵美

#### 研究会④ 現状と課題1

日時：2014年8月18日 18:00-21:00

場所：楽屋2

参加者：山田せつ子、森山直人、きたまり、和田ながら、  
塚本玲奈、川原美保

#### 研究会⑤ 現状と課題2

日時：2014年9月12日 18:00-21:00

場所：楽屋2

参加者：山田せつ子、森山直人、きたまり、川原美保

テーマ研究

III

全5回

## 〈マルチメディアシアターの再定義〉をめぐる実践的研究

京都造形芸術大学舞台芸術学科教授／演劇批評 森山 直人

### 1 研究目的と方法

本研究プロジェクトは、前年度に実施した本研究拠点の二つのテーマ研究、すなわち、①「舞台芸術における音／リズム／ドラマトゥルギーをめぐるジャンル横断的研究」、及び②「〈マルチメディアシアターの再定義〉をめぐる実践的研究」で得られた研究成果を踏まえ、あらためて、「現代舞台芸術におけるメディア・テクノロジーの可能性」という観点から一つのプロジェクトに統合して実施したものである。

マルチメディアシアターがたんに「映像・音響の最先端のテクノロジーを駆使した総合芸術」というだけで定義されるなら、今日の商業的なイベントで十分である。こうした一般的な時代状況において、それでもなお「マルチメディアシアター」を現代にふさわしい形で「再定義」するために、もう一度、オーソドックスな演劇の伝統とメディア・テクノロジーとの関係性を再検討する必要があるのではないかと——そうした観点から、本年度は、テクノロジー的な可能性を、あえて「台詞劇」または「言葉の演劇」の文脈に置きなおしてみる、という方法を採用した。

前年度、上記①においては、すでに本研究センターが、『マラルメ・プロジェクト』(2010～12)以来、さまざまなプロジェクトで研究協力を実現してきた、国際的なアーティスト・高谷史郎氏(ダムタイプ)の協力を得て、映像的側面を中心に多面的な可能性を実験した。その成果は、2014年3月末に上演された、本学舞台芸術研究センター主催公演『葵上／二重の影』(渡邊演出)に結実し、大きな劇場の成果をあげたといえる。他方、②においては、演出家の松本雄吉氏(劇団維新派)、三浦基氏(劇団地点)の協力を得て、舞台芸術における広義の音響的側面における今日的可能性を検証した(演劇公演『石のような水』(松田正隆作、松本雄吉演出)、『ファッツアー』(三浦基演出)等を具体例として分析した——ちなみに『石のような水』の音響デザイナー・荒木優光氏は、本年度は公募研究Ⅲ「想起の空間としての劇場」に中心的なメンバーとして参加しており、本研究拠点における研究の継続性・発展性が、思いもかけない形で実現したことは、まことに喜ばしいことだった。



やなぎみわ氏による公開レクチャー 元・立誠小学校講堂

### 2 具体的な展開

上記1で述べたような方針から、今年度は、2014年度に予定されていた二つの演劇プロジェクト(A)『繻子の靴』(渡邊守章演出)、(B)『ゼロ・アワー:東京ローズ最後のテープ』(やなぎみわ演出)と、具体的に連携しながら研究活動を進めた。前者は、本学舞台芸術研究センターが数年後の作品化の可能性を探っているプロジェクトであり、後者はあいちトリエンナーレ2013において初演され、本年1月～3月にかけて、ニューヨーク・ジャパンソサイエティが中心となり、北米5都市ツアー(ニューヨーク、ワシントンDC、トロント、タウソン、ロサンゼルス)が実施されたプロジェクトである。ジャパンソサイエティとは、前年度、岩村原太他3名が研究調査に訪れ、中長期的な連携の可能性が生まれつつあったため、こうした研究協力関係を構築するには、本研究拠点としても絶好のタイミングであった。いずれの演劇プロジェクトも、「近代戯曲の前衛的劇言語」(クローデル)と、「近代日本の戦争を現在の視点から見据えた現代的劇言語」(やなぎ)という違いはあっても、「劇における言葉」が、フィクションの中心を占めている点で、オーソドックスな演劇の構造を備えているといえるものであった。

### 3 近代戯曲の前衛的言語と映像・音響テクノロジー

上記(A)については、テーマ研究I「近代日本語における〈声〉と〈語り〉」と全面的に連携しながら実施し、その研究成果は、10月に京都芸術劇場・春秋座で実施した劇場実験に結実した。

クローデル『繻子の靴』をマルチメディアシアター的な視点から捉えた場合、前年度『二重の影』で試みたように、クローデルのテキストに潜在するマルチメディア的要素が凝縮された一場面を取り上げるという方法がある。本学舞台芸術研究センターが2010～12年度にかけて実施した「マラルメ・プロジェクト」の延長線上で実施されたこの方向によるアプローチは芸術的に十分可能であることが前年度の研究で実証された。しかし、もしも『繻子の靴』という長大な作品の全曲上演を構想するとすれば、膨大な台詞／ドラマの側面を、メディア・テクノロジーとの関係において、どのように捉えられるのか、という問題が残る。そうした課題から出発した本研究プロジェクトでは、たとえばジュネ『屏風』の演出等を参考に、台詞劇の力強さを活かしつつ、複数の可動式パネルに映像を投影しながら展開していく方法等が提案されたこともあったが、予算的な制約もあり、実験までには至らなかった。最終的には、クローデルのテキストと、高谷氏の静謐で宇宙的なスケールを持つハイ・クオリティの映像とが拮抗しうる場面(1日目5場、2日目13場・14場、3日目8場)を抜粋し、芸術的可能性を検証することとしたが、この方法はおおむね成功だった。次年度以降は、これを足掛かりにして、さらに「言葉と映像・音響の総合」という方向を推し進めていく。

## 4 『ゼロ・アワー：東京ローズ最後のテープ』 上演をめぐる実践的研究

やなぎみわの『ゼロ・アワー』は、第二次大戦中の日本による対米向けプロパガンダ・ラジオ放送を題材にしたドラマであり、つまりは題材面において、すでにメディア・テクノロジーの政治性が含まれている作品である。この点をふまえ、まずは12月に、この作品の初演に深く関わった音楽家の左近田展康氏（フォルマント兄弟）とプロデューサーの小崎哲哉氏を招き、リハーサルプロセスの公開と合わせて、演劇とメディアをめぐる論点を多角的に検討したことは収穫だった。

初演時には観客全員がイヤホン装着していた演出方法は、今回は別のアプローチを探ることとなった。今回の実験における主要な試みは、①ドラマ的に重要な音素材を、観客席内に複数のラジオを設置してそこから流し、ドラマと客席の関係性を変化させること、②「玉音放送」のような歴史的記憶と強く結びついた「音」を、女優がライブで朗読する「声」を加工し、「女性によるアノニマスな声」として上演すること、③直接「音」の演出とは無関係であるが、全編英語による台詞＝声の「視覚化」としての「字幕」を、たんなる補助的機材としてではなく、それ自体がドラマトウルギーの一部となるような工夫を試みることであった。岩村を中心とするジャパンソサイエティとの協力は、アメリカの5都市でツアーを成功させるための具体的な技術的プランの構築という命題を視野に収めながら行われたが、満足のいく成果を得たといえる。

ツアー終了後に行われた非公開の研究会で議論になったのは、アメリカの観客が、日本の「敗戦」の象徴である玉音放送に関する集合的記憶をもっていないため、作品の受容が、日本の観客とはまったく異なっていた、ということであった。おそらくこの点は、舞台作品における「声」＝「音」のドラマトウルギーを考察する上で、きわめて重要なポイントであることがあらためて確認された。こうしたことを踏まえて、2015年7月には、文化庁の助成金を得て、春秋座での「凱旋公演」が実施されたが、初演とは異なるアプローチが作品の構造＝骨格として浮き彫りになり、優れた成果を挙げたことを付記しておきたい。

## 5 研究組織

### 研究代表者：

森山直人（京都造形芸術大学舞台芸術学科教授／演劇批評）

### 共同研究者：

渡邊守章（京都造形芸術大学客員教授／演出家）

浅田 彰（京都造形芸術大学大学院学術研究センター所長／批評家）

やなぎみわ（京都造形芸術大学美術・工芸学科教授／現代美術作家、演出家）

岩村原太（京都造形芸術大学舞台芸術学科准教授／照明デザイナー）

小坂部恵次（京都造形芸術大学舞台芸術学科准教授／舞台監督）

### 研究協力者：

高谷史郎（マルチメディアアーティスト／ダムタイプ代表）

古舘 健（メディアオーサリング／ダムタイプ）

原摩利彦（音楽家）

服部 基（舞台照明家）

斎藤 学（音響デザイナー）

宮井 太（ニューヨーク・ジャパンソサイエティ技術監督）



『ゼロ・アワー』東京ローズ最後のテープ」 撮影：清水俊洋

小崎哲哉（REALTOKYO/REALKYOTO 編集長／編集者）  
 左近田展康（音楽家、「フォルマント兄弟」メンバー）  
 小早川保隆（音響デザイナー）  
 浜村修司（舞台監督）  
 池辺 茜（照明デザイナー）  
 井上美葉子（舞台制作者）  
 松角洋平（俳優）  
 荒尾日南子（俳優）  
 小林亜美（俳優）  
 西村壮悟（俳優）  
 松林明季（俳優）  
 松本芽紅見（俳優）  
 益田さち（俳優）  
 川原美保（京都造形芸術大学舞台芸術研究センター制作）  
 塚本玲奈（本研究拠点事務担当）

## 6 研究会内容

ここでは、全11回にわたる研究会の概要のみ、簡潔に記しておく。

### 『緋子の靴』をめぐる研究会・劇場実験

2014年7月-10月にかけて、テーマ研究Iと連携しながら下記の日程で実施した。

〈非公開〉7月3日（木）、8月18日（月）、9月1日（月）、12日（金）-13日（土）、26日（金）-30日（火）、10月1日（水）-4日（土）（※以上、テーマ研究Iと連携しつつ非公開で実施）

〈公開〉10月5日（日）＝劇場実験（@春秋座、※テーマ研究Iと合同で公開）

### 『ゼロ・アワー』をめぐる研究会・劇場実験

2014年12月-2015年3月にかけて、下記の日程で実施した。

〈非公開〉2015年1月7日（水）-11日（日）（@城崎国際センター ※集中実験①）、1月26日（月）-2月2日（月）（@ニューヨーク・ジャパンソサイエティ ※集中実験②）、

3月14日（土）（@本学学内）

〈公開〉2014年12月23日（火・祝）13:00-16:00（@元立誠小学校 講堂）

テーマ：「演劇とメディアー『ゼロアワー』再演をめぐる」  
 パネリスト：やなぎみわ、小崎哲哉、左近田展康、森山直人

テーマ研究

IV

全5回

## 舞台衣裳のモダニティに関する実践的研究

 京都造形芸術大学舞台芸術学科准教授／舞台照明 **岩村 原太**

### 1 概要

本研究では「舞台衣裳」の多面性を方法的に捉え実践的に探求するため、「展示」「実演」「実験」「考察」の4つのプロジェクトを計画した。

舞台芸術作品（あるいは上演作品）の構成要素として見る「舞台衣裳」は、「照明」「音響」「映像」といった機械技術をベースとする要素とは、そのあり方が大きく異なる。かつ、単体として成立する「服飾デザイン」とも異なり、俳優やダンサーの「身体」や「舞台美術」「装置」といった他の構成要素と、きわめて緊密な結びつきを想定しながら制作されているはずである。

舞台衣裳とは何なのか、どのように創られるのかを展示を通じて検証すると共に、2013年度の「舞台照明の美学」と題したテーマ研究において実験対象となった舞台衣裳の「色」「素材」に加え、「形」「動き」も検討すべき材料として実演及び実験の計画を進め、また衣裳-衣装の異同、語彙に関しても考察の機会を準備することとした。

こうした方針のもと、日本を代表する舞台衣裳デザイナーのひとり、堂本教子の作品を実例として取り上げた。デザイナー自身の自作再解釈とも言える展示作業を通じて「舞台衣裳」のシンプルな表現と存在感を、ひとまずは確認する必要があったのである。そして、その成果は会場とした野外能舞台のロケーションにも助けられ、当研究会の方向性を見定める上で非常に大きな意味を獲得することになった（第1回研究会）。舞踏家と音楽家による充実したデモンストレーションも忘れがたい（第2回研究会）。

野外能舞台における（つまり「照明」「音響」「映像」の影響下でない）舞台衣裳は原初的な造形の迫力を示し、舞台芸術の歴史のはじめから上演作品に関与していたに相違ない、と思わせる。この視座は今日の舞台芸術作品における舞台衣裳の地位

を物語るものでもある。同時にその視座から視点を移すならば、機械技術をベースとする（20世紀的な、あるいはマルチメディア的な）舞台芸術との舞台衣裳／衣装の親和性、衣装の可能性もが、「舞台造形」として語り得ることに気づく（第3回研究会）。

また、第4回研究会は、ファッション領域にも明るいコスチューム・アーティストひびのこづえ氏をお招きして、講演とトークの会を催した。

### 2 内容

#### 第1回研究会『堂本教子舞台衣裳展』

京都造形芸術大学野外能舞台楽心荘

2014年8月21日（木）- 23日（土）10:00-18:00 公開制作（堂本教子）

8月24日（日）- 27日（水）10:00-18:00（最終日-16:00まで）展示

（公開制作3日間／観客数45名、展示公開4日間／観客数60名）

#### 第2回研究会『堂本教子 舞台衣裳展 関連イベント トーク&デモンストレーション』

京都造形芸術大学野外能舞台楽心荘

2014年8月24日（日）14:00-15:30 トーク（杉山至）

16:00-16:30 デモンストレーション（向雲太郎）

（公開／観客数25名）

#### 第3回研究会『衣装と衣裳とコスチューム、服・布・光』

京都造形芸術大学人間館 NA402 教室

2015年3月19日（木）14:00-17:00

講師：川口知美

（非公開／参加者5名）

#### 第4回研究会『コスチュームアーティストひびのこづえさんをお迎えして』

京都造形芸術大学人間館 NA102 教室

2015年3月20日（木）18:00-20:00

講師：ひびのこづえ

モデレーター：川口知美

（公開／観客数40名）

### 3 展示

堂本教子のデザイン・制作による舞台衣裳を3群それぞれに展示するコンセプトとし、検討と同時にインスタレーションの公開制作に入った。野外能舞台の空間「地謡座」「後座（囃子座）」「楽屋（鏡の間）」と、京都盆地の西空（西山）借景、瓜生山の松林、石庭と右大文字山、これら各ロケーションを存分に活用した



デモンストレーションの風景 ダンサー：向雲太郎

展示計画である。折からの陽光や風雨、時刻の移り変わりに従って変化していく気温などが「身体を伴わない」衣服としての「舞台衣裳の存在」感を浮き彫りにする。

例えば、「タトゥー（演出：岡田利規、主催：新国立劇場）」の衣裳群は屋根のない能舞台の地謡座に吊るされ、出演者の体格に合わせたサイズ違いが折からの風にはためき激しく泳ぎだす物音、また囃子座に立て並べた「ディクテ（テキスト・演出：松田正隆、主催：京都造形芸術大学舞台芸術研究センター）」衣裳群に雨滴が広がり濃いグレー色に布味が沈む長い瞬間など、それぞれ美しく、無色のハーモニーを響かせるようであった。木立に囲まれた屋内・鏡の間での「磨赤兒（大駱駝艦）」衣裳3点が銅茜色や銀灰色のビームに包まれて置かれる様子、いずれの一着ずつも丁寧に劇文脈から解き放ち、舞台の束縛から形一つずつを引き剥がしていく堂本教子の手さばきは迷いなく確かであり、暑さの中、興味深い作業光景となった。

4日間のインスタレーション公開展示では、夏らしい蝉の声に包まれる会場の静けさと衣裳群の素材や色彩、が、実際の上演以上とも思える共鳴する空間、実見する時間の説得力を見せ、舞台衣裳が衣服であると同時に造形物であることを示すことに成功した。

## 4 実演

インスタレーションの成果を討議し、空間と衣裳、あるいは舞台美術と舞台衣裳についての意見交換を目的としたトークは、舞台美術における衣裳の役割を再確認する場となった。「手触り」「身体」「身振り」から「感じていく」衣裳の出発点、空間の「質感」「色」「世界」をどう「切り取るか」。語られたことの大半は、「劇」が空間と時間の狭間にあって「細部（マテリアル、マティエール）」の肌理、手の痕跡が質感を裏切らない、そうした堂本教子の衣裳の秘密を尋ねるものであった。

その後のデモンストレーションと質疑応答において、衣裳が出演者にとっての「第二の皮膚」であること、音（聴覚）や光（視覚）と同様に衣裳も「肌触り（触覚）」を通じてパフォーマンスに働きかけるものであることが共有された。この共有の方法に関しては次回の実験へと課題を継続するものであった。

## 5 実験

- 衣裳／衣装の役割、特に劇中キャラクターの表現について。
- 「着る服」と「観る服」の違い、着せるための工夫と見せるための工夫。

服を作るプロセスの解説を講師から受け、キーワードとした「第二の皮膚」についてその語義を探る話し合いとなった。「服」の表裏をまず問題にし、表側「観客に見える服」と裏側「出演者に接する服」との接着作業（あるいははぎ合わせ方、組み合わせ方）に衣裳家／衣装家あるいは衣裳デザイナー／衣装デザイナーの仕事がある、との認識を得る。「第二の皮膚としての衣裳と演出や舞台美術との緊張関係を解消する方法に各衣裳・衣装家の個性が出るのではないか」とのこと。衣裳の役割としてキャラクターを成立させるとした場合には内面的なアプローチ（パターンの引きなおし、些細な縫い目処理の積み重ね、着易さあるいは着にくさの追求）も必要になる、との指摘もあり、衣裳創りがコミュニケーションのアートである自覚、色を塗る作業や染める仕事もすべてその起点に立っての造形と気づく。

- コスチュームデザイナーあるいは衣装家にとっての「素材」「布」とは何か。
- 素材が持つ色彩と明かり（照明デザイン）。もしくはその逆説的な発想について。

素材を選ぶ場合のスタート地点は「第二の皮膚」、それを身につける出演者（の問題）への解答でもあり、出演者の身体を活かす素材を探すことでもある。劇の場合は衣服として成立させるためにどういう素材が必要なのか、服の場合は「色」を素材として扱おうと抽象化する。以下、幾つかのトピック。

色の組み合わせが全体の印象を左右するので最終的には照明と相まっての仕上がりになる。いくつも照明があるので一つの見え方に限らない、アパレル・婚礼衣裳などとは色の決め方の価値観が違う。色彩というよりバランス、挿し色を入れる、挿し色の鮮やかさで印象が変わる。光と色、素材と光の関係、それぞれの現場では案外無造作かもしれない。衣装家美術家がプレゼンしたものに照明家が光をあてて、うまくいっていたらそれで良い。糸の太さ縫り方と織り方でも表情が変わり、染め方縫い方でも表情が変わる。それは太陽光の中、目で見れば判断できるが、劇場では観客にとっては飛んでしまうディテールであるが、そうした糸や布の表情でも出演者にとっては大切なものであり得る。

## 6 考察

### 1部 講義「LIVE BONE」作品を巡って（資料映像視聴）

- コスチュームに託した「自然への思い」や「命を感じた経験」
- 自身の表現で大切にしている（重要視している）こと
- 原案スケッチが実際のコスチュームになっていくまで

### 2部 討議「舞台美術としての衣装／衣裳、あるいは視覚表現としてのコスチューム・デザイン」

- 上演時、撮影時、安全への配慮（身につける「服」としての）
- 映像用コスチュームと舞台用コスチュームの違いについて

ひびのこづえが主体的に呼びかけ、実現し参加するコラボレーション「LIVE BONE in 春秋座」について、作り続け、上演し続け、いつまでも終わらない作品でありたいとの講義。研究会翌週の上演に参加する学生たちからの活発な質疑もあり、トップクリエイターの創作への姿勢が強く印象される場となった。

## 7 組織

### 研究代表者：

岩村原太（京都造形芸術大学舞台芸術学科准教授／舞台照明家）

### 共同研究者：

堂本教子（舞台衣裳デザイナー／京都造形芸術大学非常勤講師）

川口知美（舞台衣裳デザイナー）

### 研究協力者：

杉山至（舞台美術家）

向雲太郎（舞踏家）

ひびのこづえ（コスチューム・アーティスト）

山本容子（舞台衣裳家）

テーマ研究

V

# アジアの大学における演劇教育

## —劇場を活用した舞台教育の方法論的研究—

京都造形芸術大学舞台芸術学科教授／舞台演技論 平井 愛子

### 1 研究の概要と目的

日本では、大学が演劇人（特に演出家や俳優などの実践家）の養成を担ってきた歴史はまだ浅く、長きに渡り各劇団の養成機関等がその役割を果たしてきた。しかし、この10年間で「舞台芸術」関連の学科を設置する大学が増えると同時に、演劇界の中で大学における演劇教育の位置づけも大きく変容してきた。

日本を除く近隣アジア各国では、以前から大学等高等教育機関での演劇教育が積極的に行われてきた。欧米の方法論を進んで採用し、自国の伝統と融合させた独自性ある実践的カリキュラムを有する大学が数多く存在し、それらの教育機関から自国の演劇界を支える人材を輩出し続けている。

本研究会は、アジア芸術教育協議体（ALIA）に加盟している本学のネットワークを活用しながら、5ヵ年の継続的なプロジェクトとして立ち上げ、各年度に各大学より2名程度の研究協力者（ワークショップ講師）を招聘し、演劇教育、特に演技トレーニングのワークショップ、および研究交流（シンポジウム）を実施することで、日本の高等教育機関に相応しい演劇教育のあり方を研究する。

### 2 研究協力者に関して

本研究会の第1回目である平成26年度は、研究協力者としてシンガポールのラサール芸術大学（Lasalle College of the Arts）よりトニー・ナイト氏とアダム・マーブル氏を招いて2日間の演技ワークショップと研究交流を行った。

ラサール芸術大学は、英国のゴールドスミス大学と提携し、英国式の大学カリキュラムを採用していることもあり、全教員

の実に4割を英国、米国、オーストラリアなどシンガポール外から招聘している。

オーストラリア人のナイト氏は、1992年から2011年までオーストラリアのナショナル・インスティテュート・オブ・ドラマティック・アート（NIDA）の演技コース主任を務め、ケイト・ブランシェットをはじめとする世界的な俳優を育てた実績を持つ。現在は、ラサール芸術大学のミュージカル・コース主任を務め、コースのカリキュラム編成から演技指導までコース運営全般を担っている。演技指導では、『スタニスラフスキー・システム』を基礎とした独自の演技メソッドを展開している。

米国人のマーブル氏は、グロトフスキーの『サイコ・フィジカル・アクション』やアン・ボガードらによって構築された『ビューポイント』などの演技メソッドを採用し、ラサール芸術大学の演技コースとミュージカル・コースで演技指導を行っている。

### 3 演技ワークショップ

□第1日

2015年2月10日（火）10:00-15:00

会場：京都芸術劇場・studio21

講師：トニー・ナイト、アダム・マーブル

受講者：京都造形芸術大学舞台芸術学科学生、卒業生（18名）

午前中は、ナイト氏の指導で、『スタニスラフスキー・システム』の「目的」、「行動」、「与えられた状況」を体験的に理解するためのシアターゲーム、「猫とねずみ」、「泥棒と警備員」などを行った。

午後からは、マーブル氏の指導で、『ビュー・ポイント』が定義する9つの要素の中から特に「テンポ」と「空間性」を意識したグループ・エクササイズを行った。「歩く」という行動に何らかの「理由付け」がされると「テンポ」が決まること。また、自身と他者、自身と建物（壁や天井、床など）との距離感を意識することから「空間性」が生まれ、それに「テンポ」を組み込んだときに「反射的応答」（kinetic response）が生まれることを体験した。

最後に、ナイト氏の指導で、チャーホフ作『桜の園』の一場面（第4幕、ワーリヤとロバーヒン）を即興的に演じるシーンスタディを行った。ここでは、ビットごとに細かく場面を分けて演じることが提案され、俳優は与えられた役の目的を変えることなく多様な表現が可能であると強調された。



演技ワークショップ風景

**□第2日**

2015年2月11日(水) 10:00-15:00

会場：京都芸術劇場・studio21

講師：トニー・ナイト、アダム・マープル

受講者：京都造形芸術大学舞台芸術学科在校生、卒業生（18名）

午前中は、マープル氏の指導で、『ビューポイント』の代表的なエクササイズである「グリッド」を行った。グリッドで「歩く」だけのシンプルなエクササイズだが、歩行速度を10段階にレベル化することで集団のテンポが生み出すダイナミズムを体感した。途中、『ビューポイント』の9つの定義、「テンポ」、「時間の継続」、「反射的反応」、「反復」、「空間性」、「トポグラフィ」、「形」、「ジェスチャー」、「構造」に関する説明があった。さらには、その中でも難解とされる「トポグラフィ」を意識したエクササイズを行った。「自分の名前を両足使って地面に書く」、「小さな鳥を想像して継続的にホップする」、「自分のつくったジェスチャーに抽象的なタイトルをつける」など。

最後に、あらかじめ学生が準備をしていたチェーホフ作『かもめ』の一場面（第4幕、マーシャとメドヴェージェンコ）の発表を行った。このシーンスタディでは、俳優が選択すべく「フィジカル・リアリティ」——自分と相手役との関係性、自分との小道具との関係性、自分と空間との関係性——の重要性が強調された。

## 4 研究交流（シンポジウム）

**□第1日**

テーマ：ラサール芸術大学・演技コースとミュージカル・コースの理念とカリキュラム

2015年2月10日(火) 15:30-18:00

会場：京都芸術劇場・studio21

講師・パネリスト：トニー・ナイト、アダム・マープル、永田靖（総括）

モデレーター：平井愛子

2人の講師より多民族国家シンガポールにおける芸術教育と演劇教育の具体的な内容と目標、実績などが話された。

演技コースでは、『スタニスラフスキー』、『ビューポイント』、『リンクレター（発声法）』など欧米の代表的な方法論を採用している一方で、宮廷舞踊や影絵など東南アジアの伝統芸能はもちろんのこと、インドの『カタカリ』、中国の『京劇』、日本の『能』に至るまでのアジアの伝統芸能の実践的教育を徹底していること。また、ミュージカル・コースでは、ブロードウェイ・ミュージカルの歴史的背景を基礎とした体系的なカリキュラム——例えば、歌唱の授業は『「ヘアー」まで』、『「ヘアー」から『レント』まで』、『「レント」以降』の3つに分けられている——が特徴的で、シンガポールの特異性に適切に対応した内容だと総括された。

**□第2日**

テーマ：韓国総合芸術学校演劇学科の理念とカリキュラム、京都造形芸術大学舞台芸術学科の理念とカリキュラム／演技ワークショップから見えてきたこと

2015年2月11日(水)

会場：京都芸術劇場・studio21

講師・パネリスト：トニー・ナイト、アダム・マープル、キム・サナエ、内野儀（総括）

講師・モデレーター：平井愛子

専任教員全員が欧米の高等教育機関に留学した経験を有する韓国総合芸術学校演劇学科では、米国のBFA、MFAプログラムを形式的なカリキュラムのモデルとしながら、教育内容のKoreanizationをテーマとしてきた。韓国伝統芸能をカリキュラムに取り入れる他、各教員が各々の専門領域におけるKoreanizationを研究していることが発表された。

京都造形芸術大学では、大学が有する2つの劇場を最大限に活かしたカリキュラムを展開している。その一つとして、大きく授業を「公演」と「トレーニング」に二分化しながら、それらの接続性を意識させる内容としている。また、京都に所在することを活かし、『能』の実践的授業に加え、大学として強調している「日本伝統芸能演習」の受講を推奨していることが発表された。

最後に、演技ワークショップのシーンスタディにおいて心理的アプローチを強調する『スタニスラフスキー』と身体的アプローチを強調する『ビューポイント』との融合が具体的に示されて実践されたことが大きな成果だったと総括された。



2015年2月10日(火) シンポジウム風景

## 研究組織

**研究代表者：**

平井愛子（京都造形芸術大学舞台芸術学科教授）

**共同研究者：**

永田 靖（大阪大学大学院文学研究科教授）

内野 儀（東京大学大学院総合文化研究科教授）

キム・ソウネ（韓国芸術総合学校演劇学科教授）

**研究協力者（ワークショップ講師）：**

トニー・ナイト（ラサール芸術大学舞台芸術学科）

アダム・マープル（ラサール芸術大学舞台芸術学科）

公募研究

I

# 老いを巡るダンスドラマトゥルギー

 ベルリン自由大学国際リサーチセンターフェロー／  
 ダンスドラマトゥルク、ダンス研究 **中島 那奈子**

## 1 研究会概要を含めた、報告

老いとダンスドラマトゥルギーに関するこの研究プロジェクトでは、ドイツを代表する振付家で、ダンスドラマトゥルクの歴史的な第一人者でもあるライムント・ホーゲ氏を京都に迎え、『An Evening with Judy』（2013）のアジア初演を劇場実験として行い、その上演を踏まえた第一回公開研究会において、ピナ・バウシュの創作を支えたホーゲ氏のドラマトゥルクとしての理論的基盤が、それ以後の振付家としての実践に繋がることを明らかにした。また、この劇場実験と研究会に加えて、5月23、24日に東京ドイツ文化センターで国際シンポジウム「老いと踊り」を、また大野一雄舞踏研究所でライムント・ホーゲ氏のワークショップを同時開催し、老いのドラマトゥルギーに関するプロジェクトの二都市提携を実現させた。第二回目の公開研究会では、埼玉大学・外山紀久子氏と木ノ下歌舞伎主宰の木ノ下裕一氏を迎え、「老い」を捉える社会的アートでの役割と、古典のレパトリー上演を支える役割の、二つのドラマトゥルクとしての仕事の方向性を探った。



『An Evening with Judy』の上演実験 撮影：Luca Giacomo Schulte

ライムント・ホーゲ氏のドラマトゥルクとしての仕事から振付家としての作品創作に至る過程を辿りながら、研究論文では、この『An Evening with Judy』を文化横断的な美学とジェンダー構築、老いという視点で上演分析を行なった。上演分析（Performance Analysis）とドラマトゥルギーは、ほぼ交換可能な語彙のように扱われるが、前者が一つの作品の要素を分解する過程を意味するのに対して、後者は部分部分を繋げてその関係を読みこむ創作過程での「構成」の意味に結びつけられる。ただ、前者の分析による批評的な過程と、後者のリハーサルでの創作過程を横断するのがダンスドラマトゥルクの役割である。そしてそれは、ホーゲ氏においてはドラマトゥルクの理論を、その後の振付家・ダンサーとしての実践に応用することで

もあった。ホーゲ氏の作品は差違に関わらず、もしくはその差違の為に、階級的にならない新しい方法で人々が繋がる様を提示する。ここでは如何にホーゲ氏自身が、敬愛する日本の美意識の一つである老いを、彼の作品『An Evening with Judy』に組み込んでいるかを、歌舞伎劇場機構や女形、芸の構造を用いて分析し、更なる創作の指標となる、老いのダンスドラマトゥルギーの構築を試みた。ピナ・バウシュが、二者択一性を再生産しないダンスの方法を展開させた時、彼女の作品はダンスでも演劇でもないタンツテアターという新しいジャンルになってしまった。伝統的な日本の美意識に影響され、ホーゲ氏の作品は、欧米の理想的踊る身体が登場する典型的なコンテンポラリーダンスのカテゴリーから超越し、そうすることで、ホーゲ氏はヨーロッパと日本における、ダンスの基盤をなす歴史的、制度的、そして美的条件を批判し続けている。

この研究成果は日・英論文として、『舞台芸術 19』及びベルリン自由大学国際研究センターが出版する *The Movements of Interweaving* に収録される。

### ●研究会内容

#### ○第1回研究会（公開）

テーマ：「老いを巡るダンスドラマトゥルギー」

日時：2014年6月3日（火）19:00-20:30

会場：京都造形芸術大学 NA102 教室

登壇者：ライムント・ホーゲ、ルカ＝ジャコモ・シュルテ、上野天志、中島那奈子

モデレーター：中島那奈子

通訳：板井由紀

参加者数：30名

内容：ここでは、65歳になるホーゲ氏自身が行う『An Evening with Judy』を老いの視点で上演分析し、またダンスドラマトゥルクの世界的な第一人者であるホーゲ氏と彼のコラボレーターとの間で、ダンスのドラマトゥルギーという実践理論について対話を行なった。ホーゲ氏によると、彼以前のドイツ演劇でのドラマトゥルクは調べものに終始し、演出家の現場と繋がっていなかったというが、ホーゲ氏は先行作品がほとんど存在しないピナ・バウシュのクリエーションプロセスに深く関わり、リハーサルでダンサーやコラボレーターとゼロから模索したという。また、ホーゲ氏がドラマトゥルクとしてそのような役割を新しく担ったことは、ピナ・バウシュがタンツテアターという新しい分野を立ち上げた経緯と関係することが判明した。

#### ○劇場実験（公開）

テーマ：「『An Evening with Judy』の上演実験」

日時：2014年6月4日（水）19:00-21:00

会場：京都芸術劇場・春秋座



「An Evening with Judy」の上演実験 撮影：Luca Giacomo Schulte

参加者数：ライムント・ホーゲ、ルカ＝ジャコモ・シュルテ、  
上野天志、カースティン・ティナップ、  
ヨハネス・サンドロップ

観客数：160名

内容：ライムント・ホーゲ氏は、伝統的理想の身体とは異なる身体を舞台上で提示しながら、この『An Evening with Judy』(2013)で、ゲイの権利獲得運動のアイコンとなったジュディ・ガーランドのイメージをRe-enactmentした。ジェンダーが交錯するパフォーマンスに、ホーゲ氏が敬愛した『ラ・アルヘンティーナ頌』を踊る大野一雄のイメージが重なり、「老い」が欧米の既成のジェンダーやダンスの規範から逸脱する美であることを、鮮明に示した。それとともに、男性のホーゲ氏が女性のイメージを身にまとうこの作品を、今回歌舞伎劇場である春秋座で花道を用いて上演することで、日本の伝統芸能における女形の歴史が、伏線のように流れることになった。日本の舞台芸術の歴史と、ドイツの振付家ライムント・ホーゲ氏による作品の新たな出会いが、日本では一度だけとなった、京都・春秋座で、アジア初演（無料公開）として実現した。

### ○第2回公開研究会（公開）

テーマ：「老いを巡るダンスドラマトゥルギー」

日時：2015年1月24日（土）15:00-19:00

会場：京都造形芸術大学 NA407 教室

講師：木ノ下裕一、外山紀久子、中島那奈子

モデレーター：中島那奈子

参加者数：12名

内容：ここでは、木ノ下歌舞伎でドラマトゥルック的な役割も担い、福島県の鬼婆伝説を扱った「黒塚」を上演中の木ノ下裕一氏と、微細エネルギー（気）についての領域横断的研究アストロエステ（ティカ）を進める外山紀久子氏を迎えた。これまでの概要を紹介した上で、木ノ下氏が講演「日本に〈ドラマトゥルック〉は必要か？～木ノ下歌舞伎「黒塚」をやりながら考えたこと～」を、外山氏が講演「老いとダンスとアストロエステ：旅立ちの日のための〈音楽〉」を行い、その後3人でパネルディスカッ

ションを行なった。ここでは、権力と責任を兼ね備えるドラマトゥルックの必要性を主張する木ノ下氏によって、ドラマトゥルックとしての専門性を高めることで、演出家や振付家への影響力をもつ方法が提示された。また、歌舞伎や能、舞踊、民話を組み合わせた木ノ下歌舞伎「黒塚」で、若い男性俳優でも「老婆」を演じられるよう、古典の型をコピーしてクリエイションの基礎にする方法が紹介された。外山氏は、セラピーとタナトロジー、プネウマや気といった呼吸の問題、そして病と異なる老いという、三つの視点を提供しながら、老いと踊りという問題を扱う芸術的、社会的、そして生存学・死生学的枠組みを検討した。これらの提案から、古典のレパトリー上演をサポートし、アート周辺の営みに社会的芸術

的意義を与える二つの役割が、ダンスドラマトゥルックの指標となることが導き出された。



木ノ下裕一氏によるパネルディスカッション

## 2 研究組織

研究代表者：

中島那奈子（ベルリン自由大学 国際研究センター  
“Interweaving Performance Cultures”フェロー）

共同研究者：

外山紀久子（埼玉大学教授）

研究協力者：

ライムント・ホーゲ（振付家）、  
ルカ＝ジャコモ・シュルテ（アーティストック・コラボレ  
ーション）  
上野天志（ダンス）  
木ノ下裕一（木ノ下歌舞伎主宰）

劇場実験：

カースティン・ティナップ（照明）  
ヨハネス・サンドロップ（音響）

公募研究

## II

LED\_Study 舞台芸術における LED 照明の可能性  
ならびに、デジタルプログラミングとの連動

舞台照明家／京都市立芸術大学構想設計非常勤講師 藤本 隆行

## 1 2014 年度プログラム

## LECTURE #1

2014 年 5 月 17 日 (土) 13:00-17:00

京都造形芸術大学 NA402 教室

『LED 照明灯体の基本』

## 講師

株式会社エルム 取締役 桐原 弘 氏

カラーキネティクス・ジャパン株式会社 取締役 井出 英典 氏

発光ダイオードの基本的な仕組みを押さえつつ、舞台照明などの専門的分野で基礎となる仕組みについての知識や現状の認識を共有する。例えば、RGB 光で作る「白」の基準/定義。灯体自体の反応の限界 = 速度や分解的な最小単位に関する現状 (16bit 制御の場合、制御系が正確なデータを送れば灯体側の回路は何処まで追従できるのかとか・・・)。調光カーブの決め方 = デザインの基準など、普段使っている際に抱く疑問に関して、実際に開発に携わられている専門職の講義と質疑応答、ディスカッションを行った。

その結果、どの状態を「白」とするかについての、絶対的な基準というものは明確には存在しないのではないかということになった。代表的な LED 素子メーカーである日亜化学工業株式会社の資料において、人間の目が白を感じるための R:G:B の

光度比に関する記述があるが、そこにその根拠は示されていない。

これは、人の目の感じ方に大きな個体差があることや、脳の恒常性による色覚の補正を考慮すると、厳密に「白」を数値化し規定することが困難であることを表しているのではないだろうか。

## LECTURE #2

2014 年 5 月 18 日 (日) 12:30-16:30

京都造形芸術大学 NA402 教室

『DMX/Artnet 制御の基本』

## 講師

有限会社タマ・テック・ラボ 代表取締役 玉田 邦夫 氏

舞台照明制御の世界的スタンダードプロトコルである DMX 信号の概要を見つつ、新たに採用され世界標準になりつつある ArtNET 制御の構造と可能性、そして限界点などを確認する。

例えば、ArtNET の通信プロトコルが TCP/IP だということ、照明制御に利用できるハードやソフトのリソース環境にどのような変化が起こったのか、どのような可能性があるのか、LED 照明との併用を意識しつつ専門職の講義と質疑応答、ディスカッションを行った。

DMX は制御信号の中身で、Artnet はその送受信方法の一つである。この Artnet は、インターネットの確立により爆発的に普及した TCP/IP という通信プロトコルを採用したもので、そのためにネット環境を確立するために開発普及しているリソースの多くを共用することができる。これは非常に大きなアドバンテージだが、制御はあくまでも DMX 信号で行われていて、その仕様に関してはこれからはしばらくは現状を維持する方向で進んでいきそうだ。

## SESSION #1

2014 年 6 月 5 日 (木) - 6 月 8 日 (日)

13:00-17:00

『LED 照明灯体の評価方法を検討する』

会場：京都造形芸術大学 春秋座

4 日間に渡って実際の劇場設備を使い、代表的な合計 7 社 11 機材の LED 灯体に、同一条件下で基本的な舞台演出表現に使



LECTURE#1 の風景

われる5種類の制御を行い、その特性を比較した。

アナログ照明灯体の代用ではなく、LED照明全般に特有の舞台表現に有効な特性を探り、各LED灯体の欠陥を比較検証するのではなく、それぞれ機種を持つ舞台表現に有効な特性をみる。

実際の劇場を使用する事で、現実的な使用パターンに則したLED照明灯体の可能性を探った。

比較条件としては、バトン2列に各灯体を吊り、バトンの高さを6.5mに設定。その各灯体から顔に当たる光の角度が約60度になるように、吊ったバトンから2.5m舞台奥に、市販の白いTシャツを着た人物と、高さ1.8mの細長い板に色画用紙のR, G, B, C, M, Y, W, Kを貼付けたカラーバーを配置。

ズーム機能のある機材に関しては、ETC Source Four 26° + LEE#201 (両バトン共に舞台中央位置に吊り込み)のレンズをいちばん前に出した状態での舞台床面のフォーカスサイズに合わせる。

舞台の状態は、床はグレーのリノリウムでカバー、舞台奥は大黒幕。

灯体の制御は、MA Lighting社製MA onPC command wingを使用。

比較制御は、以下のように行った。

各バトンに吊ってある灯体を、全部をいっせいに動かす。白/全点灯時は、全てのLEDドットが100%点いている状態とする。

- 1 全点灯30秒のフェードインと30秒のフェードアウトを、2回繰り返す。
- 2 暗転から1/255, 2/255, と8bit制御の1ポイントを3秒刻みで上げて、20ポイントまで上がったなら逆に減少。これを2往復。16bit制御が可能な機材は、16bitモードで制御。
- 3 R, G, B, W (今回は各機材のLEDドット全てが点灯している状態)の、クロスフェード。最初は暗転から17秒かけて赤へ、3秒赤の全点灯から17秒かけて緑の全点灯へ移行し、3秒間緑全点灯を維持。以後、同じ時間間隔で動き、3回繰り返して最後は白(全点灯)から17秒でフェードアウト。
- 4 全点灯と暗転のストロボ効果を、60bpm, 120bpm, 240bpm, 360bpm, 600bpm, 900bpm, 1200bpm (0.05秒に1回点灯)と、10秒毎に点滅回数を早めていき、上がり切ったら逆に下げていく。1シークエンスのみ。
- 5 個別データの収集。各機材の全点灯状態での、人物とカラーバーが入ったアップでの静止画撮影と、スペクトロメーター(スペクトロナビMK-350 / UPRtek)でのデータ収集。30秒でのフェードイン全点灯から、30秒かけてのフェードアウト暗転までの動画撮影。

以上の実験結果は、すべての動画をLED\_Studyのwebサイトで公開している。

<http://ledstudy.info/session1.php>

これらを比較した所感としては、LED灯体の明るさや色の問題は、技術的にはすでに十分実用できるように開発されて、解決している。価格的には、まだまだ高額な機材が多く一長一短

はあるが、問題解決に必要な技術もすでに十分にある。

ただ、Source Four LED S2 Lustr のようになると、LEDドットの色数が多過ぎて、プリセットを使うか、経験値を高めてこの機材専用のオペレーターにならないと使いこなせない感じがし、これはムービングライトの進化と同じ方向のように思う。

個人的には、LED照明は劇場インフラの整っていない環境でも、デジタル技術を援用したアートパフォーマンス製作の可能性を開くツールでもあると考えるので、その点では照明機材本体の機能は、RGBによる混色調光と低消費電力を生かしたシンプルな設計の方が望ましいと思う。

LED特有の立ち上がりの問題を解決するために、独自の補正をかけている機種がいくつかあり、それらはストロボ効果の実験の際、すぐに点滅がついて来なくなった。

もともと、これらの機種の大半には、「ストロボエフェクトモード」が用意されている。しかし、組み込まれているストロボエフェクトは、通常0-100%の点滅スピード調整であり、例えば明るさ90%と100%の点滅であるとか、違う色相間の点滅はできないことが多い。

## SESSION #2

2014年9月8日(月) - 9月11日(木) 13:00-17:00

『コンピューターソフトウェアによるLED制御の研究』

会場：京都市立芸術大学 大会館

プログラミング実装、制御

Max や openFrameworks などインタラクティブ・プログラミング環境や、Liddell/XKWなどのDMX制御ソフトウェア、メディアサーバーなどのソフトウェアの組み合わせによる、音や人の動きなどの外部要因とLED照明の同期操作実験。例えば、コンピューターを使い、複数の外部要因に舞台上の複数のLED灯体を対応させて制御することは、技術的には問題なく実行できる。何人もの照明オペレーターが、オーケストラの別々の楽器の音を聞き、その音のイメージに合わせた色彩や明るさを表現しつつ、それら全てを合わせて演奏の照明を作るといような作業を、コンピューターを使うことで比較的簡単に実行することができる。

そのシンプルな用例として、下記の3種のデモンストレーションを、現場でプログラミング実装から制御まで行った。その様子を、数台のカメラで捉え、理解の補助になるように編集し、LED\_Studyのwebサイトで公開している。

<http://ledstudy.info/session2.php>

## Max と Liddell の連動

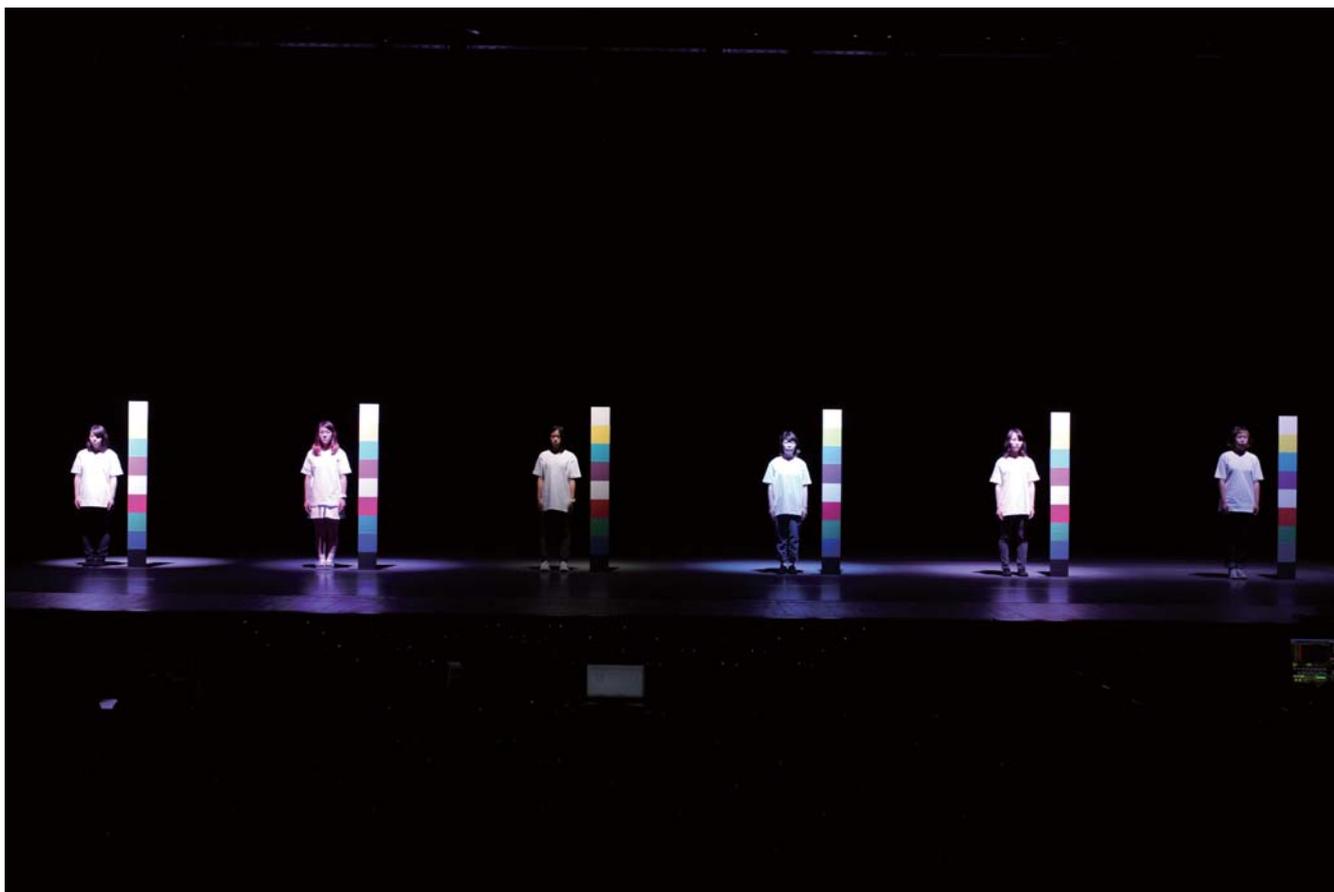
### 藤本 隆行

音などの外部要因を受けてLED照明を自動で変化させるシステムの構築を試みる。今回はタマテックラボ社による照明制御のソフトウェアLiddell/XKWをMaxと連動させて、カラーキネティクス・ジャパン社のColorBlast 12を、ヴァイオリン演奏の音色の高低と連動させた。

## メディアサーバーによるLED灯体制御

### 玉田 邦夫

映像もLED灯体と同じく、1つのドットにRGBのパラメー



SESSION#1 劇場実験 京都芸術劇場 春秋座

タが割り当てられることで画像が出力されている。そこで、この映像の1ドットをLED灯体1台と同期させてみることを試みた。

#### プログラミングを用いた映像／照明や音との連動

神田 竜

Max と openFrameworks で、リアルタイムに生成されるRGB3色の矩形が上昇していく映像を柱に投影し、画面の一番上に矩形が到達すると、その矩形と同じ色にColorBlast12が発光するプログラムを組んだ。

#### SYMPOSIUM

2015年2月17日(火) 13:00-17:00

京都造形芸術大学 NA408 教室

『01 - LED照明演出の現況、及び可能性 (LED機材比較実験から)』

『02 - 舞台表現における光環境の展望、もしくは劇場空間の拡張あるいは変容』

#### 司会

森山直人 京都造形芸術大学 舞台芸術学科 教授

#### ゲスト

杉原邦生 演出家、舞台美術家

玉田邦夫 有限会社タマ・テック・ラボ 代表取締役

滑川 武 ロームシアター京都 技術担当

服部 基 照明家

吉本有輝子 照明家

藤本隆行 研究統括

岩村原太 共同研究者

筆谷亮也 共同研究者

魚森理恵 共同研究者

LED照明の普及に伴って、今後舞台表現に置ける光環境はどうなっていくのか、もしくはどうあるべきなのか。また、LEDを含めたデジタルデバイスの侵入によって、劇場空間自体の定義が拡張もしくは変容していく可能性はあるのかというテーマで、意見交換を行った。

例えば、これまで「劇場」は、少なくないインフラの整備が必須だった。電力の供給・グリットやバトンなどの建築整備、専門的な制御機器の導入、そしてその上に各種灯体やスピーカーなどの音響機器を揃え、そしてその制御の為のスキルを持ったテクニカルスタッフがいなければならない。

しかし現在の状況としては、コンピューターに代表されるデジタル機器の広がりにより、DTMで音楽の様相が変わったように、舞台作品の成立する基盤が拡張あるいは変容する可能性がある。LEDの普及は、舞台の消費電力を引き下げ、パワードのスピーカーは直接コンピューターと繋がり、技術的なクリエーションと制御は、数台のノートブックで行える。

そのような状況を見据えて、主に照明の観点を軸に、技術的な視点から、これからの劇場空間に関して、フリートーク形式で意見の交換をはかった。



SESSION#2 京都市立芸術大学 大学会館

## 2 研究組織

### 研究代表者

**藤本 隆行**

一般社団法人 Kinsei R&D 代表

アーティストコレクティブ ダムタイプ メンバー

専門領域：舞台作品ディレクション 照明デザイン／アート

### 共同研究者

**岩村 原太**

京都造形芸術大学舞台芸術学科准教授

舞台芸術研究センター主任研究員

専門領域：劇場照明・舞台美術

**筆谷 亮也**

NPO 法人 アトリエ劇研スタッフルーム 照明班

専門領域：舞台照明デザイン

**魚森 理恵**

NPO 法人 アトリエ劇研スタッフルーム 照明班

専門領域：舞台照明デザイン

### 研究協力者

**玉田 邦夫**

有限会社タマ・テック・ラボ 代表取締役

専門領域：舞台照明等システム 制御設計制作

**神田 竜**

関西学院大学理工学研究科 特別研究員

専門領域：インタラクティブメディア表現

**石橋 義正**

京都市立芸術大学 構想設計 准教授

専門領域：映像メディア

**栗津 一郎**

アーティストコレクティブ ダムタイプ メンバー

専門領域：メディアアート

**桐原 弘**

株式会社エルム 取締役

専門領域：LED 照明

**井出 英典**

カラーキネティクス・ジャパン株式会社 取締役

専門領域：LED 照明

**吉田 一弥**

NPO 法人 アトリエ劇研スタッフルーム 照明班

専門領域：舞台照明デザイン

※ 役職等の肩書きは、2014 年当時のものを使用

### 協力：

株式会社 流

株式会社ケンコープロフェッショナルイメージング

学校法人 瓜生山学園 京都造形芸術大学 学生有志

公立大学法人 京都市立芸術大学 学生有志

立川 晋輔 (映像撮影・映像編集)

中 望 (映像撮影)

大藪 英子 (バイオリン演奏)

演奏曲：バルトーク 無伴奏バイオリン・ソナタ Sz.117 第  
2 楽章

公募研究

III

## 想起の空間としての劇場

東京藝術大学大学院音楽研究科専門研究員／ドラマトウルク 横堀 応彦

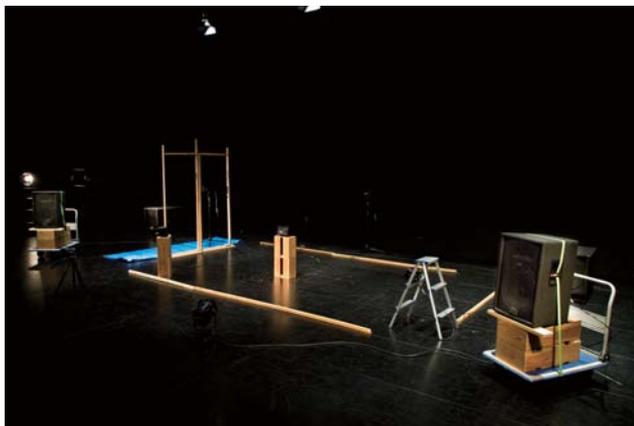
### 1 研究目的

本研究プロジェクトの目的は、劇場が持つ「想起の空間」としての機能およびその可能性について、劇場実験を行いながら考察することにある。近年盛んに行われている舞台芸術のアーカイヴ研究においては、既に完成されたもの（＝作品／テキスト）をいかに貯蔵するか、という問いに関するものが多い。しかしアライダ・アスマンが『想起の空間』において論じたように、記憶が蓄積される場であるアーカイヴの役割は、記憶を取り出す想起の機能と表裏一体である。舞台上演はそれ自体、埋もれた出来事や思索の想起とみなすことが可能であり、そこで生じた作品がさらに研究者等によって想起されるという重層的な構造を有している。したがって、アーティストと研究者双方における記憶の蓄積と想起のプロセスを領域横断的に関連づけることには、劇場という想起の場の社会的・歴史的機能を問う上で大きな意義があるものと考えられる。意欲的な音響作品を発表するアーティスト（荒木）と、集団的な創作プロセス（横堀）および「声」の演出を扱う研究者（針貝）、アーカイヴ作成という実践的な課題に対峙する舞台制作者（中山）が手を携え、劇場実験の機会を活用することにより新たな演劇研究の地平を切り拓くことを目指す。2014年度は《Showing》と題した劇場実験を2回、その前後に研究会を2回ずつ開催した。

### 2 《Showing》01 音

#### 荒木優光・音響上演『パブリックアドレス-音場2』

初回は蓄積困難であるがゆえに従来の歴史的演劇研究においては見落とされがちであった要素のひとつである「音響」の物質性に注目して、荒木優光が『パブリックアドレス-音場2』を上演し、音響がもたらす想起・記録の可能性について検討した。また終演後には荒木優光と針貝真理子によるアフタートークを実施した。



『パブリックアドレス-音場2』©Shunsuke Kano

クを実施した。上演前には荒木優光は『パブリックアドレス-音場2』に向けたクリエーションを行い、横堀応彦・針貝真理子・中山佐代はそれぞれの立場から上演に関するテキストを執筆し、当日パンフレットとして配布。後日研究プロジェクトのホームページ（<http://show-ing.tumblr.com>）上でも公開した。

公演翌日には研究プロジェクトのキックオフ・フォーラムを開催した。冒頭でコーディネーターを務めた針貝真理子が理論的基盤を確認した後、平田栄一郎氏は『劇場（シアター）と想起』と題したミニレクチャーで近年のドイツ語圏および日本の舞台作品を事例に演劇／劇場と想起の関係性について論じた。川島建太郎氏は『ベンヤミンとドイツのメディア論』と題したレクチャーで、ドイツのメディア論における主要な理論を網羅的に紹介し、八角聡仁氏は『消える音を聴く——複製技術時代の舞台芸術をめぐる』と題したミニレクチャーを行った。後半は横堀応彦がモデレーターとなり、参加者も含めて前日に上演された『パブリックアドレス-音場2』をめぐる議論を行った。また同作品は10月に横浜 ST スポットにて再演されたが、その際の上演について針貝真理子は「聴覚空間のシアトリカルティ―『パブリックアドレス音場2』横浜上演について」と題した論考を執筆し、ホームページ上で公開した。

### 3 《Showing》02 写真

#### 加納俊輔『山びこのシーン』

2回目となる《Showing》では春秋座の舞台上に客席を組み、写真メディアを扱う美術家・加納俊輔による上演作品『山びこのシーン』を発表した。上演前には加納俊輔と荒木優光が『山びこのシーン』に向けたクリエーションを行い、その制作過程の一部は『加納俊輔×荒木優光「山びこのシーン」の記録』として Social Kitchen において上演前後1週間ほど展示された。また事前テキストとして、針貝真理子は「メディウムによる「劇場（シアター）」再考」と題した論考を執筆し、ホームページ上で公開した。終演後には春秋座ホワイエで加納俊輔、八角聡仁、倉石信乃によるアフタートークを実施した（モデレーター：横堀応彦）。

公演翌日には非公開で4名の講師を招いた研究会を行い、前日に上演された『山びこのシーン』をめぐる議論を行った。八角氏は「写真のインデックス性」や「写真のシアトリカルティ―」といった問題と関連づけながら論じ、倉石氏はマイケル・フリードの「芸術と客体性」における議論を参照しながら論じた。森山氏は演劇研究者としての立場から、現代における劇場の在り方について論じた。倉石氏には本上演の事後テキスト執筆を依頼し、「物の流れ—加納俊輔『山びこのシーン』劇評」と題した論考を寄せていただいた。また針貝真理子は「写真・劇場・


 山びこのシーン  
©Yuki Moriya


加納俊輔×荒木優光「山びこのシーン」の記録 ©Shunsuke Kano

音一『山びこのシーン』の記録一』と題した論考を執筆し、どちらの論考も現在ホームページ上で公開されている。

#### 4 研究組織および各研究会詳細

##### ◇研究組織

##### 研究代表者：

横堀応彦（東京藝術大学大学院音楽研究科専門研究員／ドラマトゥルギー）

##### 研究分担者：

荒木優光（音響作家）

針貝真理子（慶應義塾大学文学部非常勤講師／ドイツ演劇・思想）

中山佐代（制作者／マレビトの会）

##### 研究協力者：

松田正隆（立教大学現代心理学部教授）

平田栄一郎（慶應義塾大学文学部教授）

八角聡仁（近畿大学文学部教授）

川島建太郎（慶應義塾大学文学部准教授）

倉石信乃（明治大学理工学部教授）

加納俊輔（美術家）

##### ◇各研究会詳細

##### 第1回研究会（非公開）

『パブリックアドレス - 音場2』に向けたクリエーション

日時：2014年7月-8月

会場：京都造形芸術大学ほか

##### 第2回研究会（公開：観客数40名）

《Showing》01音 荒木優光・音響上演『パブリックアドレス - 音場2』

日時：2014年8月10日（日）17:00-19:00

会場：京都芸術劇場 studio21

アフタートーク登壇者：荒木優光（モデレーター：針貝真理子）

##### 第3回研究会（公開：参加者数15名）

共同研究プロジェクト「想起の空間としての劇場」キックオフ・フォーラム

日時：2014年8月11日（月）13:00-17:00

会場：京都造形芸術大学 NA409 教室

講師：平田栄一郎、川島建太郎、八角聡仁

モデレーター：針貝真理子、横堀応彦

##### 第4回研究会（非公開）

『山びこのシーン』に向けたクリエーション

日時：2014年10月-3月

会場：京都造形芸術大学ほか

##### 第5回研究会（公開：観客数90人）

《Showing》02写真 加納俊輔『山びこのシーン』

日時：2015年3月3日（火）18:30-21:00

会場：京都芸術劇場 春秋座

アフタートーク登壇者：加納俊輔、八角聡仁、倉石信乃  
（モデレーター：横堀応彦）

\*同時開催 加納俊輔×荒木優光「山びこのシーン」の記録

日時：2015年2月28日（日）-3月8日（日）

会場：Social Kitchen

##### 第6回研究会（非公開）

日時：2015年3月4日（水）10:00-12:00

会場：京都造形芸術大学 NA409 教室

講師：八角聡仁、倉石信乃、森山直人、加納俊輔

## 日韓合同製作プロジェクトの プレゼンテーション (仁川・京都)

※「コンテンポラリーダンスの創造と方法論をめぐる実践的研究」研究会の事後レポート



ダンス評論家 キム・イェリム／木村 典子 記

京都造形芸術大学舞台芸術研究センターが主催する、日韓共同ダンス創作プロジェクト『原色衝動』(本公演タイトル)のワークインプログレスとして、公開プレゼンテーションが、韓国・仁川(2014年8月)と、日本・京都(2015年3月)で実施された。この国際的な共同クリエイションは、韓国のダンサー・コレオグラファー、キム・ソンヨンと日本の同じくダンサー・コレオグラファーの白井剛が2年間定期的に共同作業の場を持ち、作品の完成を目指しているものである。

2013年にプロジェクトがスタートしてから、作品創りを継続する中で、京都(2014年2月)、仁川(同年4月)でワークショップと、2回のプレゼンテーションも実施している。その後、2014年8月4日～14日にレジデンススペースである、「仁川アートプラットホーム」に滞在し、クリエイションをおこなった後に、本格的な公開プレゼンテーションが実施され、更に2015年3月には、京都造形芸術大学の春秋座で、より舞台作品として進化された形でプレゼンテーションが公開された。

この2回のプレゼンテーションの間にも、ふたりは2014年11月に東京・京都でクリエイションの時間を継続して持っている。

このあと2015年7月～9月にかけて、日本で最終クリエイションをおこなった後、9月末に春秋座で『原色衝動』の初演が実施される。その後、2016年2月には東京、世田谷パブリックシアターでの再演が予定され、また現在、韓国での公演の時期も検討されている。

今回のプロジェクトを主催する京都造形芸術大学舞台芸術研究センターは、2001年に設立されたが、舞台芸術の創造過程の総体を研究対象として、かい離しがちであった「創造の現場」と「学術研究」とのより有機的な結びつきを図ることを目的にしている。歌舞伎の劇場としての体をなし、伝統芸能公演が可能な「春秋座」と、実験的な公演をおこなう「studio 21」での公演を運営しており、学内の研究員ならびに教員たちの公演はもとより、海外から優れたクリエイター、研究者を招いて共同製作をおこなうなど、多様な事業を試みている。

京都造形芸術大学の元教授であり、舞台芸術研究センターの主任研究員であるコレオグラファーの山田せつ子は、それぞれの活動を長い間見守ってきたなかで、同年代のダンサーふたりを結びつけるアイデアを出した。どのような視点がこの2人を結びつけることになったのか。

白井剛とキム・ソンヨンは、共通する感覚を持ちながら全く異なる世界を持つダンサーであり、同時代的な問題意識と課題を抱えて生きる青年でもある。

2007年、「ネクストウェーブ・ダンスフェスティバル」(真洞劇場)への招聘で、初めて韓国に紹介された白井剛は、大学で産業デザインを専攻したにもかかわらず、後にダンスを始めた。

ダンスカンパニー「Studio of Live Works 発条ト(ばねと)」を設立し、短期間で「パニョレ国際振付賞」と「トヨタ・コレオグラフィーアワード<次世代を担う振付家賞>」を受賞して

注目を集めた彼は、より多角的な創作活動のために「Abst」を立ち上げ、5人のミュージシャンたちと協力して『theco -ザコー』を発表し、更にダムタイプの藤本隆行など10人のアーティストたちと、マルチメディア作品『true / 本当のこと』を製作して11か国20都市で公演した。

日常の、ささいなことを素材に「慣れ親しんだものを見つめなおす」ことを提示するのが特徴的である白井剛は、大きな作品を作る力を持ちながらも、ソロ作品で独自の芸術性をさらに発揮する点でキム・ソンヨンとの共通点を持っている。

「2014年仁川アートプラットホーム公演分野レジデンスアーティスト」として活動中のキム・ソンヨンは、20代で流麗なダンステクニックが注目されたダンサーだ。若くしてコレオグラファーとしてデビューし、30代から「若手振付家創作公演」「大韓民国舞踊大賞」「ソウル舞踊祭」など大きな振付コンペティションで受賞し、韓国内の舞踊界でその存在感を示している。2000年代から日本と活発な交流をしてきたが、最近ではフランス、イタリア、アメリカなど活動領域を広げている。キム・ソンヨンの海外での活動は、自分のレパートリー作品を公演する単なる交流ではなく、かの地に長期間滞在して振付をし、自身のダンスを伝えるワークショップをおこなうなど、アートイン・レジデンスの成功例として評価を受けている。

2014年8月15日、韓国・仁川アートプラットホームのC棟公演場でおこなわれたプレゼンテーションのタイトルは『Sleep on the kill』だった。

この作品は人間関係の中に存在する攻撃性を探求するもので、彼らの社会に対する挑発をあらわにした。『Sleep on the kill』というタイトルが意味するのは、現在の彼らの状況へのまなざしだ。今年40歳(数え年)になった同じ年のふたりは多くの部分で不安定な状況に置かれている。外界から様々な決定を促されるが、これは見えない攻撃であり、暴力であるというのが彼らの心境だ。そこでふたりは防衛できない人々の話をしたいといった。

『Sleep on the kill』は、攻撃性を語るために舞台上でいくつもの椅子を使用するが、これは座る用途以外に武器、無秩序、混乱を表現する道具となる。まず、彼らの挑発はステージに水をまくことから始まる。ペットボトルに入った飲むための水を舞台にまく行為は、暗黙の了解事項をやぶる小さな反抗である。それからふたりは、高さのある椅子を移動させて飛び石のようにして渡ってみせたり、危なっかしく積み上げて崩してみせたりするが、椅子の角にうずくまったキム・ソンヨンの姿はアラン・パーカー監督『バーディ』(1984年)の有名なポスターを連想させる。ベッドの枠にうずくまり、窓から差し込む光を見つめるこのポスターの主人公は、理想を夢見る青年の孤独な姿という点で『Sleep on the kill』のふたりと似ている。それぞれ足を床につけない動きと、倒れた白井剛の危うい身体から彼らの世代が感じている生きることへの不安定さが感じられた。

ふたりのダンサーの身体は異なる印象を与える。強靱で安定したキム・ソンヨン(キム・ソンヨン)の身体は、白井剛(しろいこう)といると攻撃性があらわれる。反面、シンプルにみえる白井剛の瘦せた身体は凄然に対応する切実さを秘めている。パワーにおいてキム・ソンヨンのほうが圧倒するものがあるが、白井剛のひるまない存在性は期待以上に観客を緊張させた。

椅子を大きな音とともに倒し、足で蹴る暴力行為は、その対象が互いの身体へと向かいもするが、これは生における絶対的な存在に対する敵対感が周囲の人物にも向かい、敵と味方の両極で揺れる人間関係を暗示している。ふたりが椅子のように重なって倒れ、床で遊泳するがごとく身体をたえず連ね、ラインを描く行為は熾烈なダンスをより大きなパワーで、印象的なシーンを作り上げていた。ドラムの音に合わせて即興ではない計画された振付で踊り、更に躍動的にマットに倒れ込むシーンを後半に配置したことは、巧妙に計算された戦略だった。

積み上げられた椅子の塔が崩れ落ちることで一段落した2人の対立は、敢えて中途半端な和解へと向かう。そして更にそこから互いの股間をつかみあう行為がはじまる。このシーンはタブーとされるいたずらのように見え、恥部への原始的な攻撃は、両国の情緒を理解してこそ感じられるシーンだった。

そのあと、椅子はふたりによって、唐突に、丁寧に配置される。

配置されたふたつの椅子は、彼らに代わってしばらく静かな空間を作り出す。しかし、最後にふたりは、この椅子の世界を、安定した妥協を、足で蹴るという結論を選ぶ。

ナイフで切り裂くようにカットオフした照明と行為の結末は、強烈な印象を残す感覚的な選択だった。『Sleep on the kill』はプレゼンテーションとはいえ、完成度の高いものだった。

プレゼンテーション後におこなわれたアフタートークでふたりはそれぞれのダンスを尊重し、理解する姿を見せてくれた。白井剛は「キム・ソンヨンは美しく、ダイナミックだ。彼の動きが確かなものなら、僕の動きは小さく、繊細で、日常的で、平凡だ。一緒に仕事をしながら、キム・ソンヨンは繊細になり、僕はもっと大胆になった。互いに影響されている」と話した。

彼らの嗜好は明らかに異なる。異なる意見は対話を通じて解決されるが、おそらく10年前に出会っていたなら喧嘩になっていただろうという。キム・ソンヨンは「最初から理解してスタートしようと思った。互いの観点と方法を尊重してスタートしたので、それぞれの長所を互いにかなりと与え、受け入れあった。これから進んでいく方向が少し見えた」と話した。

彼らはこの社会でダンサー、コレオグラファーとしてどう生きていくのか？

ダンスを続けるべきなのか？

社会的立場、経済的保障など、数々の悩みと向き合う時期があり、これらに対する共感が仕事を円滑にした。

最後にふたりはこの作品は面白く作ったのではないと言った。「世界には何が不足でいて、自分たちは何を望むのか？その漠然とした質問に一步近づく仕事だった」という収穫を残したと語った。

日本・京都でのプレゼンテーションは、2015年3月22日に京都造形芸術大学内の春秋座でおこなわれた。

9月の本公演に向けて『原色衝動』というタイトルで公開されたこのプレゼンテーションには、もうひとりのアーティスト荒木経惟(あらかみつゆ)が加わっていた。正確にいうなら世界的な写真家であ

る荒木経惟の作品がこの作品のモチーフとされたといえる。

キム・ソンヨンと白井剛は、荒木経惟の写真の中で、彼らのダンスを解明することを選んだ。

この舞台では、何より照明と舞台セット、演出をどうするのか、十分な試みをおこなうことに焦点をおいていた。仁川でのプレゼンテーションがふたりのダンサーの心的共感に重きをおいたなら、京都でのクリエーションは、写真と具体的にどのように向かい合うのか、美術的可能性を多方面から探求する時間だった。今回のプレゼンテーションでは、ダンスの動きを作る時間というよりは、美術的な試みをおこなう時間といえるほど、多様なイメージを見せてくれる公演だった。

『原色衝動』は『Sleep on the kill』の連作であることを暗示するように、こおろぎの声と数十個の椅子で始まった。

その椅子の間に灯台の明かりのように回転する照明は、これからどのように作品が展開するのか好奇心を刺激した。予想に反して『Sleep on the kill』とは別途の作品のように展開する。この作品のために選ばれた荒木経惟の写真は、キッチュであり、グロテスクで、エロティックで、美しい。

彼は花、人形など、純粹なものたちに怪奇な服を着せ、また異なる視覚の美しさを創り出す作家だ。舞台では椅子、小さな太鼓、恐竜など、多様な小道具を使ったシーンが続き、多様な演出が羅列される。特にカメラ撮影、スクリーンを利用した技法が様々に提示される。

『原色衝動』は、調和をなせないものたちの衝動が創り出す第3の世界を見せてくれる作品だ。

まるで荒木経惟の写真の人形と血のように、その衝動は出会いから共存へ、時間が流れながら融和まで至るように思える。ダンサーはそれぞれのアイデアを現実化させ、多くの衝動の時間を過ごしたはずだ。シーンによってキム・ソンヨンの嗜好と白井剛の嗜好が異なっていたら、どちらがより勝っているかより、様々な可能性を見せたという点でその意義を認められる。

この日、キム・ソンヨンは、3年前白井剛と出会い、類似点と相違点を発見し続けており、この点が作品にどうあらわれるのか悩んだと語った。はじめ、荒木経惟の写真に重荷を感じ、親しみが感じられず、観ることさえ大変だったが、写真に吸収されるのではなく、ダンスの中に写真を探そうと思ったそうだ。

一過性の作品が乱舞するこの時代、文化はインスタント、ファーストフードにたとえられる。

3年にわたって見せてくれた京都造形芸術大学舞台芸術研究センターのプロジェクトは、これとは反対に慎重で深みのある芸術創造であり、過程の研究である。何度もレジデンスとプレゼンテーションを通じて数々の過程を見せてくれたが、完成のための方向性は山田せつ子(やまだせつこ)にしっかりと守られている。ファーストカルチャーの限界を越えて意味ある仕事だ。

異なる環境の中で生きてきたアーティストたちの国境を越えての共同作業は、互いに創造的影響を与え合うのは明らかである。今回のプロジェクトは単純に両国の文化や風習の差から発生する要素の結合ではなく、現在、両国で注目されるふたりのダンサーが互いの芸術性を深める、作家的視点の仕事であり、これを基に世界のダンスの場に進出することを目標にしている。それゆえさらに期待が持てるプロジェクトだ。日韓合作のコンテンポラリーダンスの世界進出。これは両国の公演芸術界に新たな風となるだろう。



### 拠点ホームページ

日本語：<http://www.k-pac.org/kyoten/>  
英語：<http://www.k-pac.org/kyoten/en/>

京都芸術劇場 検索 共同利用・共同研究のバナーをクリック



## 公募のご案内

「舞台芸術作品の創造・受容のための領域横断的・実践的研究拠点」では、共同利用・共同研究拠点事業の一環として、2016年度の共同研究課題の公募を実施します。本事業は、京都芸術劇場を使用した「劇場実験」を核とするプロジェクトを通して、学術研究の基盤強化および新たな学術研究の展開を目指しています。2016年度の公募についての案内は、2015年秋ごろ発行予定の公募要項をご覧ください（なお、公募要項はHPでもご覧いただけます）。

## 2015年度 研究プロジェクト

### ■テーマ研究Ⅰ

「クローデル『縞子の靴』上演のための実践的研究」／渡邊守章（演出家／京都造形芸術大学客員教授）

### ■テーマ研究Ⅱ

「ダンスの創造的行為をめぐって」／山田せつ子（舞踊家）

### ■テーマ研究Ⅲ

「セノグラフィの歴史アーカイブ構想」／岩村原太（京都造形芸術大学舞台芸術学科准教授／舞台照明家）

### ■テーマ研究Ⅳ

「アジアの大学における演劇教育——劇場を活用した舞台教育の方法論的探究」／平井愛子（京都造形芸術大学舞台芸術学科教授／舞台演技論）

### □公募研究Ⅰ

「『ダンス 2.0』の環境構築を通して今日的課題へとダンスをつなぐ試み」／木村覚（日本女子大学人間社会学部文化学科准教授／美学・ダンス研究）

### □公募研究Ⅱ

「マヤコフスキー研究～詩人の仕事の解明と新しい演劇言語の開発」／三浦基（演出家／地点代表）

### □公募研究Ⅲ

「想起の空間としての劇場」／横堀応彦（東京藝術大学大学院音楽研究科専門研究員／ドラマトゥルク）

### 発行／編集

## 京都造形芸術大学

### 共同利用・共同研究拠点事務局（舞台芸術研究センター内）

〒606-8271 京都市左京区北白川瓜生山2-116 京都造形芸術大学内  
TEL. 075-791-9144（平日10時～17時）

### 拠点へのアクセス

- JR・近鉄京都駅、京阪三条駅、阪急河原町駅から京都市バス5番「岩倉」行き乗車、「上終町・京都造形芸大前」下車（京都駅から約50分、三条駅・河原町駅から約30分）
- 京都市営地下鉄丸太町駅・北大路駅から（約15分）京都市バス204循環に乗車、「上終町・京都造形芸大前」下車
- 京阪電車出町柳駅から叡山電車に乗り換え、茶山駅下車（徒歩約10分）

※駐車場はございませんので、車・バイクでのご来学はお控えください。

## 京都造形芸術大学



2013 - 2018

事務局 竹宮華美、塚本玲奈、四ヶ浦香、黒岩浩美、桑原綾子